鍛冶ヶ嶺遺跡

― 豊順鉱業株式会社ベントナイト露天採掘事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 ―

2001

安中市埋蔵文化財発掘調査団

鍛冶ヶ嶺遺跡

— 豊順鉱業株式会社ベントナイト露天採掘
事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

2001

安中市埋蔵文化財発掘調査団

序

安中市は群馬県の西南部に位置し、上毛三山に囲まれた田園都市です。古くは東山道が通り、江戸時代には中山道、そして現在は国道18号線と交通の要として栄えてまいりました。

今回の発掘調査は、豊順鉱業株式会社が安中市嶺字鍛冶ヶ嶺に於いて行うベントナイト露天掘り事業に伴うものです。

発掘調査により、縄文時代の住居跡、奈良・平安時代の住居跡、またその頃と思われる掘立柱建物跡等が発見されました。

特に注目されるのは掘立柱建物跡で、柱の間隔、大きさ、配置などから官的な性格や寺院、豪族の館と言った性格の建物が推測されました。また、鍛冶ヶ嶺遺跡の立地を見ると、独立した丘陵の頂上部分にあたります。このような高台にどのような性格の建物が建っていたのか、とても興味深く思われます。また、このような建物跡は安中市内に於いて初めての発見であり、貴重な遺跡となりました。

発掘調査は、このような遺跡の様子を後世の人々に伝えてゆくために、記録保存の措置を講じるものです。

こうした、埋蔵文化財はかけがえのない郷土の遺産であります。市民の皆様にも郷土の歴史を学習していただけるよう、生きた教材として、社会教育、学校教育の場で広く活用を図り、文化財愛護の精神を広く普及するよう努めてゆく所存であります。

終わりに、発掘調査に御協力していただいた地元の皆様や、調査に従事していただいた大勢の方々にはこの場を借り厚く御礼を申し上げたいとおもいます。

平成13年８月

安中市埋蔵文化財発掘調査団

団　長　高　橋　重　治

例　　言

1．本書は豊順鉱業株式会社が行うベントナイト露天採掘事業に伴う鍛冶ヶ嶺遺跡（略称Ｃ－８）の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．発掘調査は平成６年11月１日より11月30日までの間実施した。遺物整理は発掘調査終了後より平成13年８月31日までの間断続的に実施した。

3．調査主体は安中市埋蔵文化財発掘調査団であり、調査は安中市教育委員会文化振興課文化財係主任（文化財保護主事）千田茂雄が担当した。

4．本書の編集は千田茂雄が行い、執筆は石器を伊藤佳奈子が行い、他を千田茂雄が行った。

5．遺構の写真撮影は千田が行ったが、航空写真は㈲青高館に委託した。

6．遺構の実測は千田が行った。

7．基準点の国家座標取付及び、測量基準杭は豊順鉱業株式会社が行った。

8．遺物の写真撮影は、千田が行った。

9．遺物の実測及び遺構・遺物のトレースは千田、氏家芳子、稲葉恵美子が行った。

10．図版、写真図版の作成は千田、稲葉、須藤明子、庭山美子、高橋佳子、鬼形敦子が行った。

11．本調査における記録、出土遺物は安中市教育委員会が保管している。

12．発掘調査及び遺物整理の期間中多くの方々に有益な指導、助言、協力を行っていただいた。また発掘調査及び遺物整理に従事していただいた方に厚くお礼申し上げます。

凡　　例

1．遺跡全体図の縮尺は１／300である。

2．住居址等遺構の縮尺は１／80である。

3．遺物の縮尺は次のとおりである。

縄文土器：１／４　土師器・須恵器：１／４

石器：A類石器２／３、１／２、B類石器１／４、その他１／３

4．土層説明中での記号、略称は次の通りである。

色調＜：より明るい方向を示す（例１＜２：１より２の方が明るい）

しまり、粘性　◎：あり、○：ややあり、△：あまりない、×：なし

混入物　◎：大量、○：多量、△：少量、＊：若干、×：なし、

WP：白色粒子、YP：板鼻黄色軽石層、RP：ローム粒子

5．石器実測図中の記号は石材を示し、略号は次の通りである。

Ob：黒曜石	Ch：チャート	Sh：頁岩	HSh：硬質頁岩
BAn：黒色安山岩	An：安山岩	SS：（牛伏）砂岩	Sc：結晶片岩
GrR：緑色岩類	Tf：凝灰岩		

6．石器の分類は以下のとおり『大下原遺跡・吉田原遺跡』(1993年)の分類に従った。

石器種別	器　　種	技術的特徴	石材種別	石 材 名	石 材 の 特 徴
A類	石鏃 石錐 スクレイパーA類 石匙A類 リタッチドフレイクA類 楔形石器	押圧剥離を多用。	Ⅰ類	黒曜石 チャート 硬質頁岩 黒色安山岩 めのう	硬質で粘度が少ない。 剥片剥離に最も適し、鋭利。
B類	打製石斧 スクレイパーB類 石匙B類 リタッチドフレイクB類	直接打撃を多用。	Ⅱ類	頁岩 輝緑凝灰岩	多少軟質でやや粘度がある。 剥離に適するが、鋭利さは劣る。
C１類	磨石 凹石 石皿	使用痕により石器と認識される。	Ⅲａ類	安山岩	軟質で粘度がある。 剥離に不適で剥離面は粗面。 耐火性に富む。
C２類	敲石 台石 砥石		Ⅲｂ類	(牛伏)砂岩	軟質で粘度が少ない。剥離に不適でボロボロと崩れる。
D類	石棒 多孔石 棒状礫 丸石	直接打撃・敲打・研磨を複合的に用いる。	Ⅳ類	結晶片岩	節理が発達している。
E類	磨製石斧		Ⅴ類	緑色岩類	重量があり比較的軟質で粘度がある。 剥離にあまり適さず、剥離面は粗面。
F類	石製品 垂飾		Ⅵ類	その他	多種多様な希少石材。

打製石器における実測図中の細密平行線は、使用痕（刃部摩耗痕・装着痕）を示す。

磨石・凹石では、使用による摩耗部分を白抜きで示し、自然面を点描で示している。凹の部分は切り合い関係により区別し表現した。

磨面→凹：実線、凹→磨面：破線

スクレイパー等の二次調整の方法は次のとおり記号で示した。

▼　　：主剥離面の打点と方向

P　　：押圧剥離的な調整加工

P＋D：押圧剥離と直接打撃の併用または粗雑な押圧剥離

D　　：直接打撃による調整加工

M　　：使用等によると推定される連続した微細剥離（マイクロフレイキング）

本 文 目 次

序
例　　言
凡　　例
本文目次
挿図目次
表 目 次
図版目次
Ⅰ　調査に至る経過……1
Ⅱ　調査の方法と経過……1
Ⅲ　遺跡の地理的・歴史的環境……1
Ⅳ　層　　序……6
Ⅴ　遺跡の概要……9
Ⅵ　遺構と遺物……10
Ⅶ　成果と問題点……41

挿図目次

第１図　鍛冶ヶ嶺遺跡と周辺遺跡の位置図……3
第２図　鍛冶ヶ嶺遺跡位置図……4
第３図　鍛冶ヶ嶺遺跡調査区設定図……5
第４図　基本層序柱状図……6
第５図　鍛冶ヶ嶺遺跡全体図……7
第６図　Ｊ－１号・Ｊ－２号住居址実測図……11
第７図　Ｊ－１号・Ｊ－２号住居址出土の土器……12
第８図　グリッド出土の縄文土器……14
第９図　Ｊ－１号・Ｊ－２号住居址出土の石器……18
第10図　グリッド出土の石器……19
第11図　石器系列・器種・石材組成……20
第12図　縄文時代遺物出土状況(1)……21
第13図　縄文時代遺物出土状況(2)……22
第14図　Ｈ－１号住居址実測図……24
第15図　Ｈ－２号住居址実測図……24
第16図　Ｄ－１号・Ｄ－２号・Ｄ－３号土坑実測図……24
第17図　Ｈ－１号住居址出土の遺物(1)……25
第18図　Ｈ－１号住居址出土の遺物(2)……26
第19図　Ｈ－２号住居址出土の遺物……26
第20図　Ｄ－４号・Ｄ－５号・Ｄ－６号・Ｄ－７号・Ｄ－８号・Ｄ－９号土坑実測図……30
第21図　Ｔ－１号掘立柱建物址実測図……31
第22図　Ｔ－２号掘立柱建物址実測図……32
第23図　Ｔ－３号掘立柱建物址実測図……33
第24図　Ｔ－４号掘立柱建物址実測図……33
第25図　土坑出土の遺物……35
第26図　掘立柱建物址出土の遺物……35
第27図　グリッド出土の遺物(1)……35
第28図　グリッド出土の遺物(2)……36
第29図　遺物出土状況……40

表　目　次

第１表　鍛冶ヶ嶺遺跡遺物観察表(1)……13
第２表　鍛冶ヶ嶺遺跡遺物観察表(2)……15
第３表　鍛冶ヶ嶺遺跡遺物観察表(3)……27
第４表　鍛冶ヶ嶺遺跡遺物観察表(4)……28
第５表　鍛冶ヶ嶺遺跡遺物観察表(5)……29
第６表　鍛冶ヶ嶺遺跡遺物観察表(6)……37
第７表　鍛冶ヶ嶺遺跡遺物観察表(7)……38
第８表　鍛冶ヶ嶺遺跡遺物観察表(8)……39

図版目次

図版１　鍛冶ヶ嶺遺跡全景
図版２　鍛冶ヶ嶺遺跡全景
図版３　Ｊ－１号・Ｊ－２号住居址全景／Ｈ－１号住居址全景／Ｈ－２号住居址全景／掘立柱建物址全景
図版４　Ｔ－１号掘立柱建物址全景／Ｔ－２号掘立柱建物址全景／Ｔ－３号掘立柱建物址全景／Ｔ－４号掘立柱建物址全景

Ⅰ　調査に至る経過

平成６年９月、安中市商工観光課より豊順鉱業株式会社が安中市嶺字鍛冶ヶ嶺1506―３ほか87筆において行うベントナイト露天採掘について、安中市教育委員会へ岩石採取に係る意見聴取の照会があった。

該当地域は、周知の埋蔵文化財包蔵地であるためその旨の回答を行った。その後、豊順鉱業株式会社と市教育委員会の協議により、実際にどのような文化財がどのくらい埋蔵されているのかを確認するため、豊順鉱業株式会社からの依頼により該当地域内の試掘調査を実施した。試掘調査の結果、住居址等の埋蔵文化財が、開発地域内全体に存在することが確認された。そのため、豊順鉱業株式会社と市教育委員会の間で埋蔵文化財の取扱いについて再度協議が行われた。

しかし、計画変更をしても遺跡地を回避することは難しく、計画変更自体不可能との結論に至ったため、開発地域内の発掘調査を実施して、記録保存の措置を講ずることとなった。

Ⅱ　調査の方法と経過

発掘調査は平成６年11月１日より開始され、平成６年11月30日までの間実施した。調査はベントナイトの露天採掘によって切り取られてしまう部分について記録保存の措置を講ずる事とした。

調査はまず、開発地区内の発掘調査対象地区内全域を網羅するようグリッドの設定を行った。１グリッドは４ｍ×４ｍで北西隅を基点とし、北から南へＡ，Ｂ，Ｃ…西から東へ１，２，３…と呼称するようにした。また、グリッドをさらに四分した２ｍ×２ｍの細グリッドを設定し、北西、北東、南西、南東の順にアルファベットの小文字でａ、ｂ、ｃ、ｄと呼称することにした。そして、座標値は国家座標に取り付けた。国家座標値は、Ｃ―12グリッドがＸ＝34941.837、Ｙ＝―88761.052、Ｃ―22グリッドがＸ＝34911.270、Ｙ＝―88735.235である。

調査はまずバックホーによりⅢ層（暗褐色土）上面まで掘削し、その後人力により遺構、遺物の確認作業を実施した。また確認された遺構は順次精査を行った。確認された遺構は（有）青高館に委託し、気球により空中から写真撮影を行い、そのプリントを元にデジタルコピーにより左右のひずみを補正し、それを元に現地で細部の確認を行うと言った方法で作成した。土層断面図は必要に応じ作成した。また、遺物の取り上げは遺構ごとに行った。また、必要に応じて遺構、遺物の写真撮影を行った。

遺物整理は、発掘調査終了後から平成13年８月31日までの間断続的に実施した。

作業は、遺物の水洗・注記→接合・復元→実測・拓本→トレース・写真撮影の順で行い、並行して遺構図面の整理・素図作成、トレース、写真整理を行った。

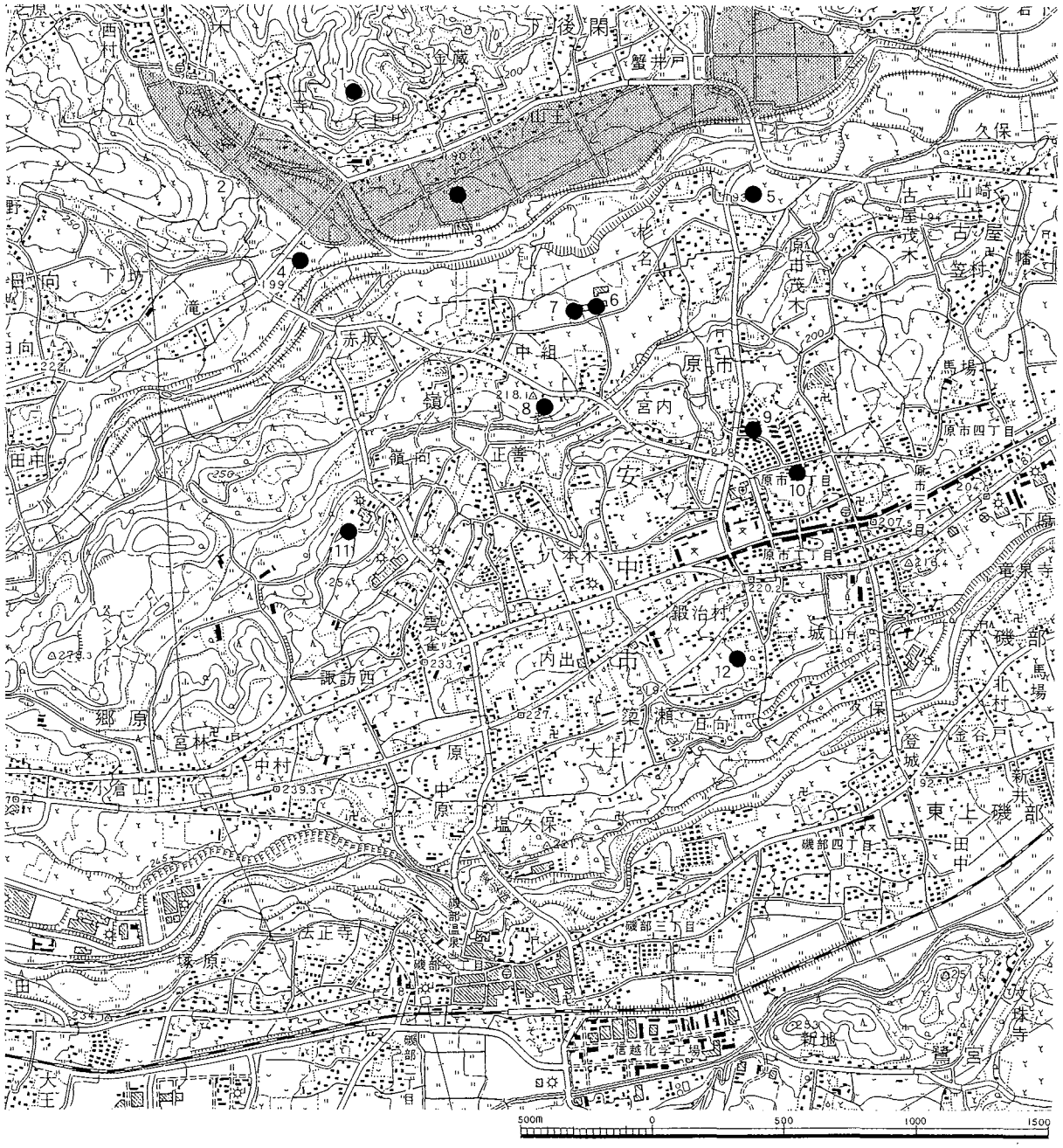
Ⅲ　遺跡の地理的・歴史的環境

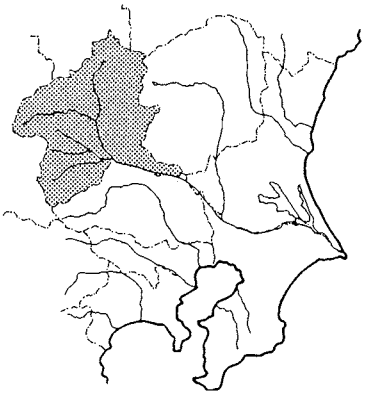
安中市は群馬県の西部に位置し、市域を南北に分断するように碓氷川が流れている。この碓氷川の北側には九十九川が流れ、これらの河川流域には河岸段丘が発達している。

鍛冶ヶ嶺遺跡は、この安中市の嶺地区字鍛冶ヶ嶺地内に所在している。嶺地区は、安中市の中央からやや西寄りに位置し、九十九川の上位段丘上に位置する。遺跡のある鍛冶ヶ嶺地区は嶺地区の西端に位置し、北側には九十九川上位段丘上を流れる八咫川、南側には小さな谷津が入り込み独立丘陵状の立地を呈している。丘陵の標高は250mで、比高差は25mを計る。急な傾斜を上がった丘陵上には、丘陵の１／４程の面積を占め豊順鉱業株式会社の原市工場が建ち、ベントナイトの精製を行っている。今回のベントナイト露天採掘は、残りの丘陵をほとんど対象としたもので、事業終了後は大きく景観が変化する大規模なものである。

安中市内の嶺地区周辺は、各時代にわたり遺跡の立地条件としては良好な地域だが、早くから宅地開発が盛んで、すでにかなりの部分が宅地化され大規模な開発があまり行われていない。そのため同じ市内の中野谷地区などに比べ、発掘調査によって確認されている遺跡数はあまり多くない。嶺地区及び周辺の遺跡を見ると、縄文時代前期後半から中期及び奈良・平安時代の集落遺跡である榎木畑遺跡（８）、縄文時代前期前半、奈良時代の住居址を確認した清水Ⅰ遺跡（９）、弥生時代、古墳時代の集落遺跡である杉名薬師遺跡（５）、古墳時代から平安時代の小鍛冶の工人集落を推測させる嶺・下原（６）、嶺・下原Ⅱ遺跡（７）、奈良時代の集落と、東日本に於いて初めて検出された中世（16世紀）の瓦質陶器生産窯の清水Ⅱ遺跡（10）がある。これらの遺跡が立地する丘陵を九十九川に下ると、九十九川の河川敷には九十九川沿岸遺跡群（２）として調査された平安時代の浅間Ｂ軽石直下水田址が広い範囲で確認されている。また、この九十九川沿岸遺跡群中には、６世紀初めに造られたと思われる後閑３号墳（３）がある。この古墳は、関東地方では最も古い横穴式石室を有する古墳の一つとして知られる、簗瀬二子塚古墳と密接な関係があったと考えられている。

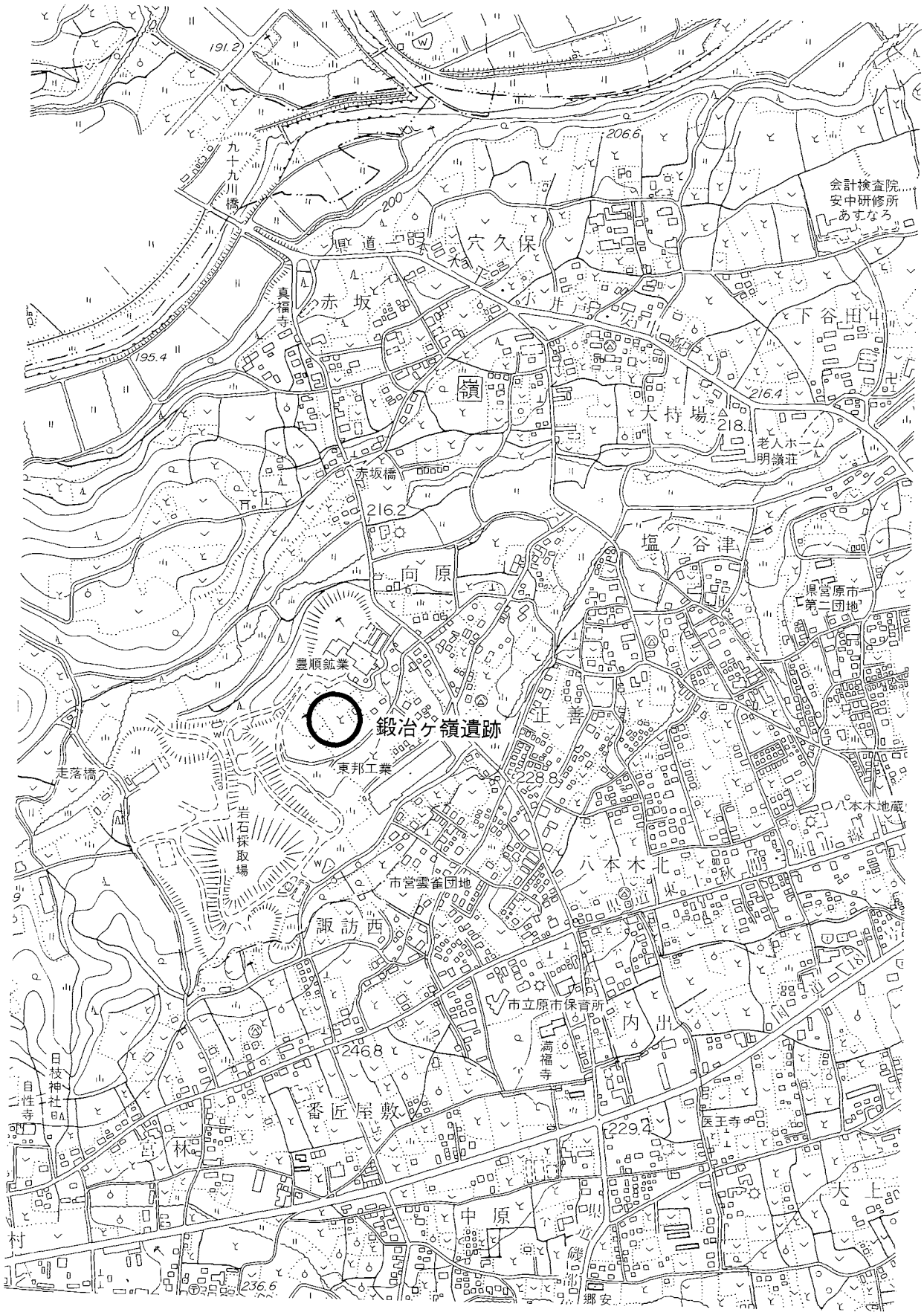
この他、九十九川上位段丘上には、発掘調査によって確認された遺跡以外にも、遺跡詳細分布調査によって縄文時代から平安時代にかけて、幾つもの遺跡が確認されている。



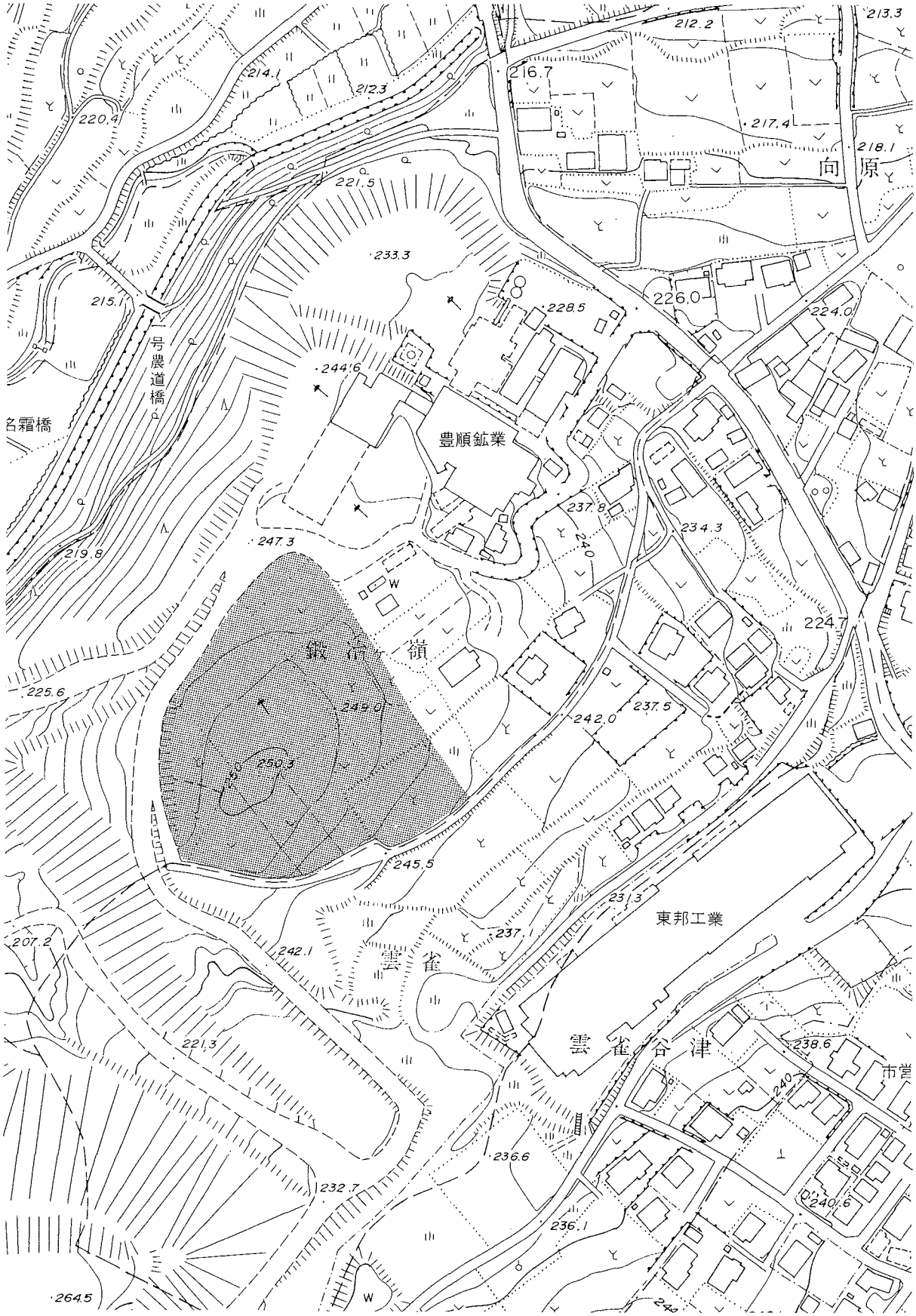


1　後閑城
2　九十九川沿岸遺跡群
3　後閑３号墳
4　九十九Ｉ号墳
5　杉名薬師遺跡
6　嶺・下原遺跡
7　嶺・下原Ⅱ遺跡
8　榎木畑遺跡
9　清水Ｉ遺跡
10　清水Ⅱ遺跡
11　鍛冶ヶ嶺遺跡
12　簗瀬二子塚古墳

第１図　鍛冶ヶ嶺遺跡と周辺遺跡の位置図



第２図　鍛冶ヶ嶺遺跡位置図（１：10,000）

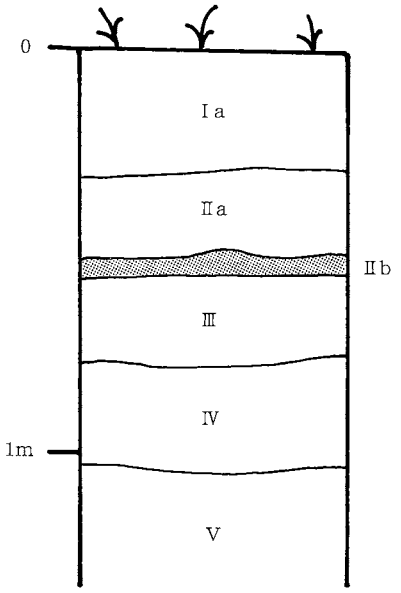


第３図　鍛冶ヶ嶺遺跡調査区設定図（１：2,500）

Ⅳ　層　　序

鍛冶ヶ嶺遺跡の基本層序は第４図のとおりである。浅間Ｂ軽石（As－Ｂ：1108年降下）が確認される。浅間Ｂ軽石は調査区周辺部分に確認される。

Ⅰａ層	黒褐色土層	浅間Ａ軽石を多量に混入する。現在の耕作土で、しまり、粘性共にあまりない
Ⅱａ層	黒色土層	粘性はややあるが、しまりはあまりない。As－Ｂ軽石を多量に混入する。
Ⅱｂ層	灰褐色軽石層	浅間Ｂ軽石純層。
Ⅲ層	黒色土層	As－Ｂ軽石はまったく混入しない。遺構の覆土の主体を成す層である。粘性はややあるが、しまりはあまりない。
Ⅳ層	暗褐色土層	Ⅲ層より明るく、しまり、粘性共にある。この層の上面で遺構が確認される。
Ⅴ層	黄褐色粘質土層	この層からローム層となる。粘性、しまり共にある。



第４図　基本層序柱状図

第５図　鍛冶ヶ嶺遺跡全体図

第5図　鍛冶ヶ瀬遺跡全体図

V　遺跡の概要

鍛冶ヶ嶺遺跡からは、縄文時代の遺構、奈良・平安時代の遺構が確認された。遺構はいずれも丘陵の縁辺付近に存在し、中央の平坦部分からは時期不明のピットが数百基確認されただけであった。以下、各時代ごとの概要を述べる。

縄文時代

縄文時代の遺構は、前期有尾式期の竪穴式住居址１軒と前期諸磯式期の竪穴式住居址１軒が確認された。この２軒は重複関係にある。いずれの住居も確認面からの掘り込みはしっかりとしている。出土遺物はあまり多くなく、有尾式期を中心として検出された。

奈良・平安時代

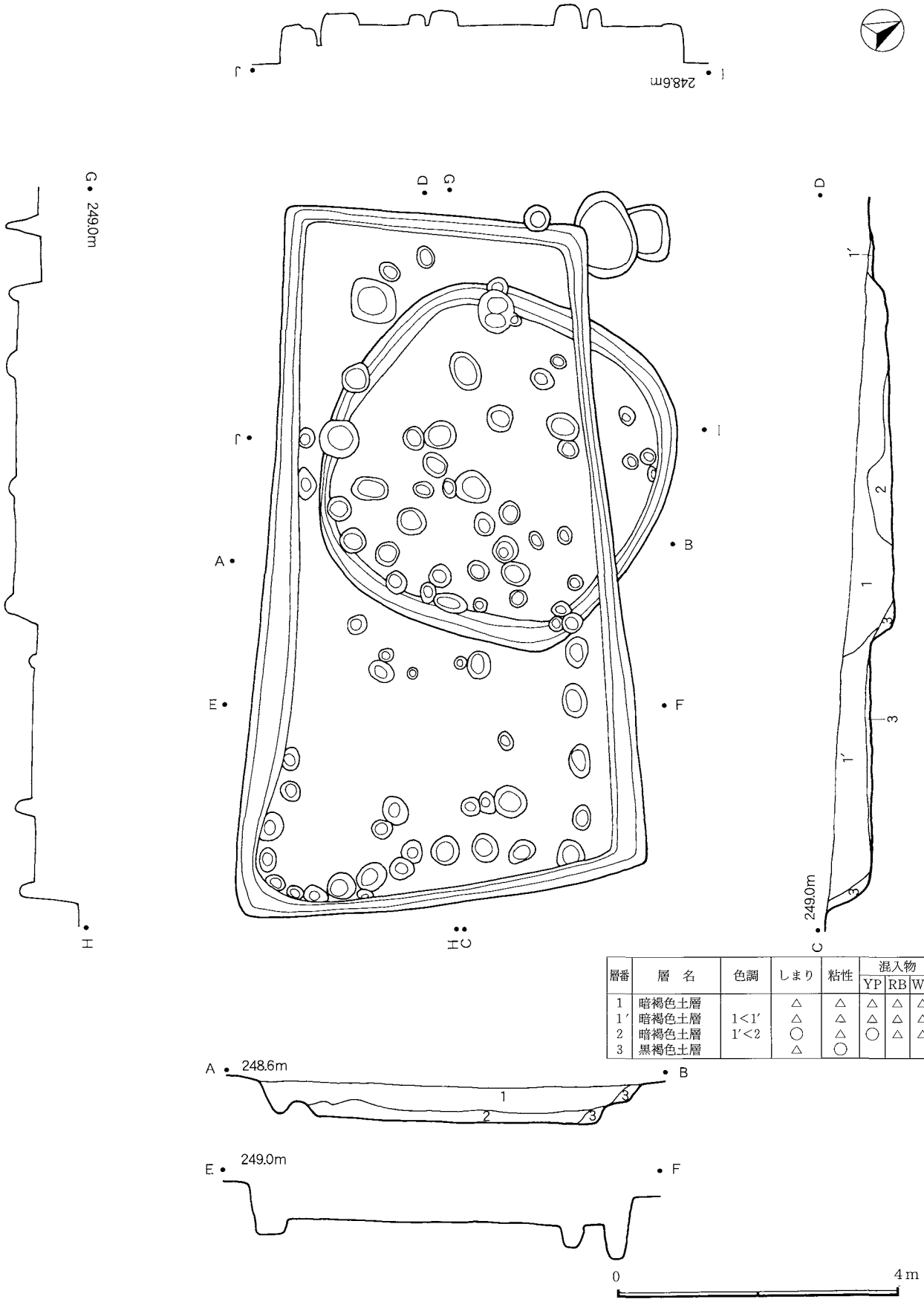
奈良・平安時代の遺構は、竪穴式住居址２軒、当該期に属すると思われる大型の掘立柱建物址４棟と土坑９基を確認した。この他周辺には多くのピットなどが確認され、当該時期に属するものも含まれていると思われる。

大型の掘立柱建物址は、２棟が東に向かい長軸方向が90度になるように配置されている。他の２棟も小型ながら周辺に配置されている。柱穴は平均すると１辺が１m程の方形で、柱痕を確認できる物もあった。掘立柱建物址に隣接して隅円長方形の土坑が２基を１単位として３単位確認されている。これらの土坑も掘立柱建物址と密接な関係にあった遺構と考えられる。安中市内に於いて現在まで、このような遺構は確認されておらず、立地等も含め注目される。

VI　遺構と遺物

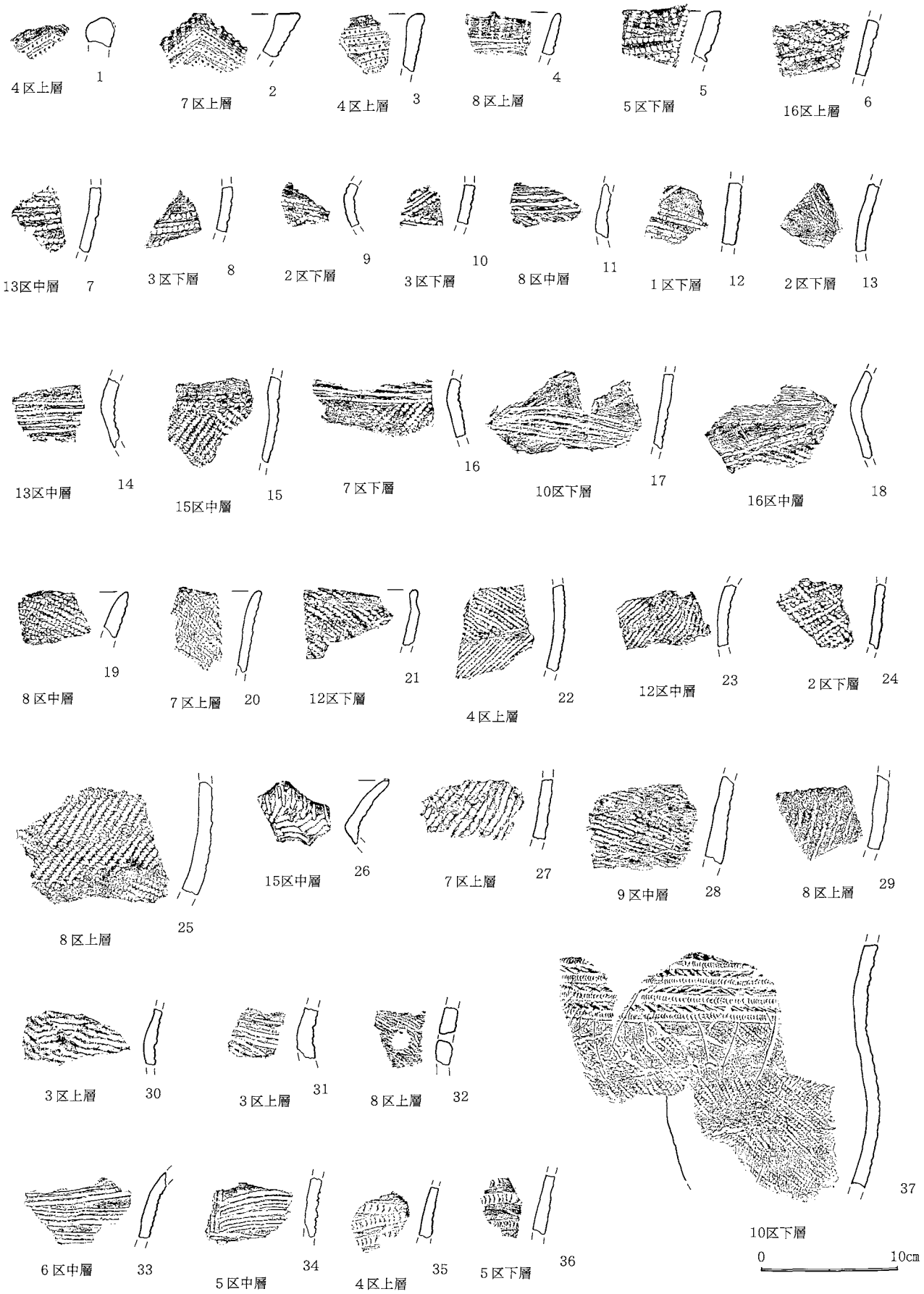
住　居　址	規模（m）	主軸	
J　—　1　号	10×5.8	N—59°—W	
住　居　構　造	J－2号住と重複する。平面形は縦長台形であり、掘り込みは確認面から約56cm。壁下には掘り込みの深いしっかりとした周溝が回り、それに沿うように北面から東面を中心に柱穴列が確認された。 主柱穴と思われる柱穴は、住居址長軸方向に直線的に4基が2列、計8基が確認された。 住居址の掘り込みの外側には、住居と対応するような柱穴は確認されなかった。 炉は確認されなかった（J－2号住による削平？）。		
遺物出土状況	遺構確認当初住居址の重複は確認できず、J－1号住を16区に分割し遺物の取り上げを行った。中層に達した段階で住居址の重複が確認されたため、J－1号住の16分割内に含めて遺物の取り上げを行った。 遺物の出土は少量であった。上層においては東側に出土が集中し、中層においては全体から遺物が検出された。下層からの出土が最も多く、J－2号住の部分に集中する傾向を持つ。		

住　居　址	規模（m）	主軸	
J　—　2　号	5.0×4.8	N—35°—W	
住　居　構　造	J－1号住と重複する。平面形は隅丸方形であり、掘り込みは確認面から約68cm。壁下には周溝が回り、それに沿うように小さな柱穴が東面から南面に確認された。 主柱穴と思われる柱穴は中央部分に4基確認された。 炉は中央南寄りにそれらしき掘り込みを確認したが、焼土等の確認ができず明確な物ではない。		



層番	層　名	色調	しまり	粘性	混入物		
					YP	RB	WP
1	暗褐色土層		△	△	△	△	△
1′	暗褐色土層	1<1′	△	△	△	△	△
2	暗褐色土層	1′<2	○	△	○	△	△
3	黒褐色土層		△	○			

第6図　J－1号・J－2号住居址実測図

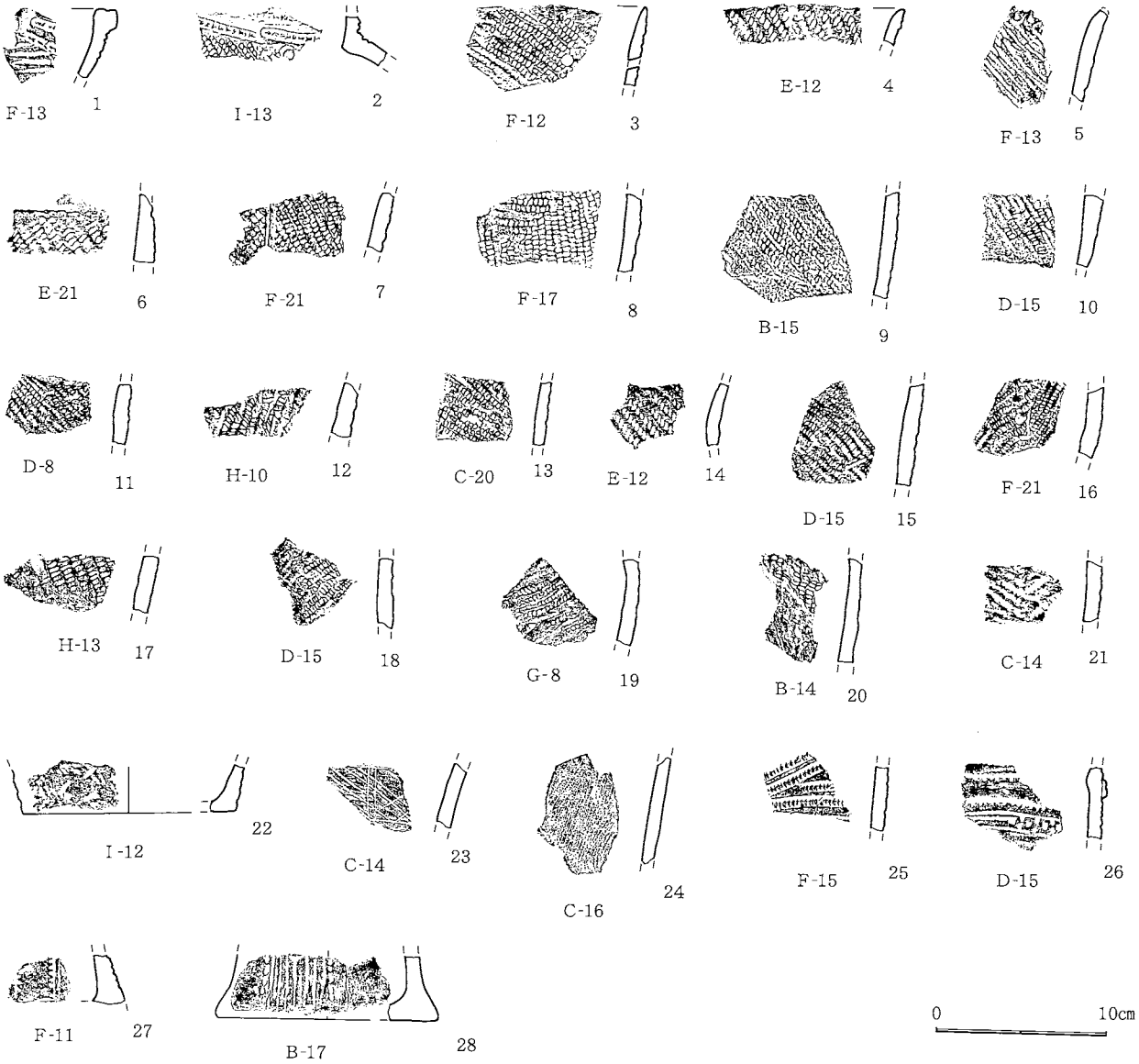


第7図　J－1号・J－2号住居址出土の土器

土器（住居）

No.	部　位	文様等の特徴	胎　土	備　考
1	口縁部（波状）	平行沈線、爪形文	繊維、粗砂粒を含む	
2	口縁部（波状）	平行沈線、爪形文、刺突文（口唇部に縦位施文）	繊維、粗砂粒を含む	
3	口縁部	平行沈線、爪形文	繊維、粗砂粒を含む	
4	口縁部	平行沈線、刺突文（口唇部縦位施文、以下横位施文）	繊維、砂粒を含む	
5	口縁部（波状）	平行沈線、刺突文（口唇部縦位施文、以下横位施文）	繊維、粗砂粒を含む	
6	胴部	刺突文（菱形施文）	繊維、粗砂粒を含む	
7	胴部	刺突文（菱形施文）	繊維、粗砂粒を含む	
8	胴部	刺突文（菱形施文）	繊維、粗砂粒を含む	
9	胴部	刺突文（菱形施文）	繊維、砂粒を含む	
10	胴部	刺突文（菱形施文）、平行沈線	繊維、粗砂粒を含む	
11	胴部	刺突文（横位施文）	繊維、砂粒を含む	
12	胴部	刺突文（横位、斜位施文）	繊維、砂粒を含む	
13	胴部	刺突文（菱形施文）	繊維、砂粒を含む	
14	胴部	刺突文（横位施文）	繊維、砂粒を含む	
15	胴部	刺突文(横位、斜位施文)、縄文(RL･LR の羽状)	繊維、砂粒を含む	
16	胴部	刺突文(横位、斜位施文)、縄文(RL･LR の羽状)	繊維、砂粒を含む	縄文の摩滅著しい
17	胴部	刺突文（横位、斜位施文）、平行沈線	繊維、砂粒を含む	
18	胴部	刺突文（菱形施文）、平行沈線、縄文（RL･LR の羽状）	繊維、砂粒を含む	
19	口縁部	縄文（RL の斜行）	繊維、砂粒を含む	
20	口縁部	縄文（RL の斜行）	繊維、砂粒を含む	
21	口縁部	縄文（RL の斜行）	繊維、砂粒を含む	
22	胴部	縄文（RL の羽状）	繊維、砂粒を含む	
23	胴部	縄文（RL の斜行）	繊維、砂粒を含む	
24	胴部	縄文（附加条）	繊維、砂粒を含む	
25	胴部	縄文（RL･LR の羽状）	繊維、粗砂粒を含む	
26	口縁部（波状）	条線（口唇部にヘラ状工具により縦位施文）、縄文（無節の羽状）	繊維、砂粒を含む	
27	胴部	縄文（無節の斜行）	繊維、粗砂粒を含む	
28	胴部	縄文（無節の斜行・結束）	繊維、砂粒を含む	縄文の摩滅著しい
29	胴部	縄文（無節の斜行）	繊維、砂粒を含む	縄文の摩滅著しい
30	胴部	縄文（無節の羽状）	繊維、砂粒を含む	縄文の摩滅著しい
31	胴部	平行沈線	繊維、砂粒を含む	摩滅著しい
32	胴部	縄文（無節の斜行）、せん孔（補修孔？）	繊維、粗砂粒を含む	

鍛冶ヶ嶺遺跡観察表(1)



第8図　グリッド出土の縄文土器

No.	部　位	文様等の特徴	胎　土	備　考
33	胴部	平行沈線	繊維、砂粒を含む	
34	胴部	平行沈線	繊維、粗砂粒を含む	
35	胴部	爪形文	繊維、砂粒を含む	
36	胴部	爪形文	繊維、砂粒を含む	
37	胴部	爪形文・浮線文(横位平行に施文)、縄文(RLの斜行、結束)	砂粒を含む	

土器（グリッド）

No.	部　位	文様等の特徴	胎　土	備　考
1	口縁部	平行沈線・爪形文、刺突文	繊維、砂粒を含む	
2	胴部	平行沈線・爪形文 縄文（RLの斜行）	繊維、砂粒を含む	
3	口縁部	縄文RL、補修孔	繊維、砂粒を含む	
4	口縁部	縄文RL	繊維、粗砂粒を含む	
5	口縁部	コンパス文、縄文（直前段反撚）	繊維、砂粒を含む	
6	胴部	縄文RL	繊維、砂粒を含む	摩滅著しい
7	胴部	爪形文（縦位）、縄文(RL・LRの羽状)	繊維、砂粒を含む	
8	胴部	縄文(LRの羽状)	繊維、砂粒を含む	摩滅著しい
9	胴部	縄文(RL絡条体)	繊維、砂粒を含む	
10	胴部	縄文RL	繊維、砂粒を含む	
11	胴部	縄文RL	繊維、砂粒を含む	摩滅著しい
12	胴部	縄文（附加条）	繊維、砂粒を含む	
13	胴部	縄文RL	繊維、砂粒を含む	
14	胴部	縄文RL	繊維、砂粒を含む	
15	胴部	縄文LR	繊維、砂粒を含む	
16	胴部	縄文RL	繊維、砂粒を含む	
17	胴部	縄文RL	繊維、砂粒を含む	
18	胴部	縄文LR	繊維、砂粒を含む	
19	胴部	縄文LR	繊維、砂粒を含む	
20	胴部	縄文LR	繊維、砂粒を含む	
21	胴部	縄文（RLの羽状）	繊維、砂粒を含む	摩滅著しい
22	底部	縄文（無節L）	繊維、砂粒を含む	
23	胴部	平行沈線（菱形・縦位施文）	繊維、砂粒を含む	
24	胴部	平行沈線（縦位施文）	繊維、砂粒を含む	
25	胴部	平行沈線、爪形文	繊維、砂粒を含む	
26	口縁部	隆帯、平行沈線、角押文	繊維、砂粒・雲母を含む	
27	底部	平行沈線、角押文	繊維、砂粒・雲母を含む	
28	底部	平行沈線、角押文	繊維、砂粒・雲母を含む	

鍛冶ヶ嶺遺跡観察表(2)

石器

［縄文時代］

石器組成

鍛冶ヶ嶺遺跡の石器組成は第11図に示したとおりである。調査区全体で258点出土した。遺構に伴った石器は数量が少なく、時期の相違した２軒の住居址が重複しており、帰属時期の特定・統計学的分析は困難である。したがって、次項において石器の様相についてのみ述べる。

石器各説

Ａ類石器

石鏃（第10図１・２）　２点検出された。すべてＩ形態（凹基無茎鏃：１・２）黒曜石製である。

スクレイパーＡ類（第９図１・第10図３・５・６）　19点検出された。Ｉａ形態（押圧剝離：１・３・６）６点、Ｉｂ形態（直接打撃＋押圧剝離）４点、II形態（直接打撃：５）４点、III形態（縁辺微細剝離）５点である。石材別では黒曜石７点、チャート２点、硬質頁岩１点、黒色安山岩９点である。黒曜石ではＩａ・III形態が多くみられ、黒色安山岩では直接打撃を加えるＩｂ・II形態が目立っており、石材の性質による剝離法の選択が認められる。

石匙Ａ類（第９図２）　２点検出された。２はIIａ形態（横形･押圧剝離）で黒色安山岩製である。

楔形石器　図示していないが１点検出された。黒曜石製である。

石核Ａ類　図示していないが３点検出された。黒曜石２点、黒色安山岩１点である。黒曜石では、両極技法を用いたと思われるものが認められた。

黒曜石原石　図示していないが１点検出された。一端が剝離されているが、原礫面の形状、重量１・３ｇと小さいことから、石鏃の素材剝片を剝離することは困難であると思われる。また角礫状であることから、転石ではないと判断される。

Ｂ類石器

打製石斧（第９図３～５・第10図４）　５点検出された。すべてＩ形態（断面蒲鉾形・片刃）であり、頁岩製である。３は原礫面を残すことから、初期の段階で剝離された剝片を用いたと考えられる。第10図４は両面に擦痕が残されており、基部の摩耗は装着痕と推定される。縄文前期における打製石斧は片刃が特徴的であるが、本遺跡においてもその傾向が認められた。

スクレイパーＢ類（第９図６）　46点検出された。うち４点が住居址より確認された。Ｉａ形態（押圧剝離）７点、Ｉｂ形態（直接打撃＋押圧剝離）４点、II形態（直接打撃：６）24点、III形態（縁辺微細剝離）11点である。１点のみ結晶片岩製であり、その他はすべて頁岩製である。剝片を素材としており、素材剝片自体の形状を著しく変えるような、二次加工を施さないものがほとんどである。

リタッチド・フレイクＢ類（縁辺微細剝離・一辺の１／２以下）　図示していないが４点検出された。すべて頁岩製である。

石核Ｂ類（第９図７）　７点検出された。すべて頁岩製である。これらの石核から作出された剝片は比較的小形であると考えられ、スクレイパーＢ類が製作されたものと推定される。

Ｃ１類石器

磨石（第10図７）　９点検出された。Ｉ形態（円形）１点、II形態（楕円形）５点、III形態（棒状：７）１点、Ｖ形態（不定形）２点である。すべて安山岩製である。７は特殊磨石と考えられる。

凹石（第９図８～11・第10図８）　12点検出された。Ⅰｂ形態（円形・凹→磨：第９図８）２点、Ⅱａ形態（楕円形・磨→凹：10）１点、Ⅱｂ形態（楕円形・凹→磨：11・第10図８）３点、Ⅱｃ形態（楕円形・凹のみ：９）２点、Ⅴａ形態（不定形・磨→凹）１点、Ⅴｂ形態（不定形・凹→磨）２点、Ⅴｃ形態（不定形・凹のみ）１点である。すべて安山岩製である。11は裏面がよく磨られており、磨石との機能転用が認められる。

石皿　図示していないが１点検出された。欠損しており形態は不明だが、表面は平坦に磨られている。結晶片岩製である。

Ｃ２類石器

敲石（第10図９）　２点検出された。Ⅲ形態（棒状）安山岩製である。

Ｄ類石器

棒状礫（第９図12）　２点検出された。結晶片岩製である。

多孔石　図示していないが１点検出された。結晶片岩製である。石皿の一部である可能性があるが、欠損しているため不明である。

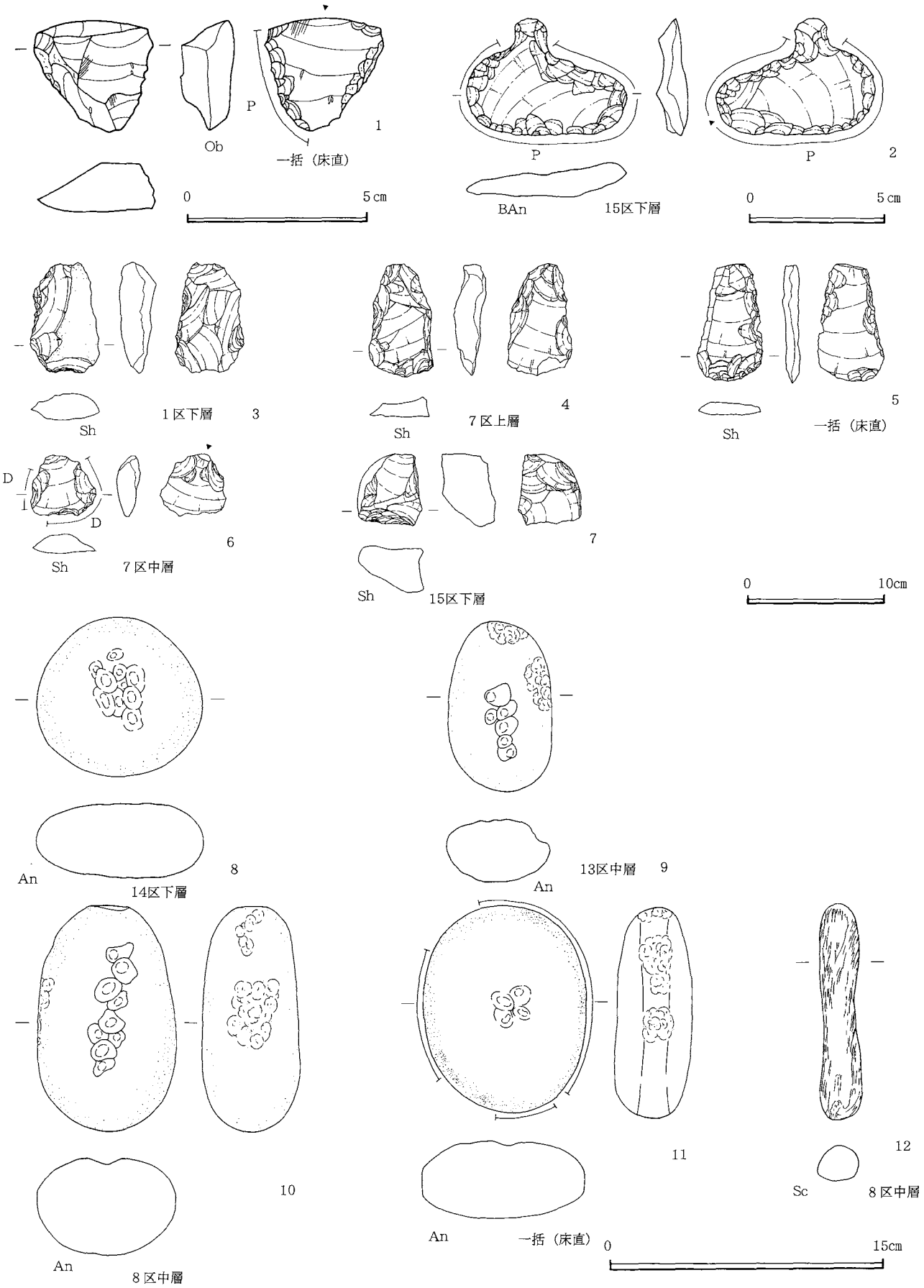
丸石（第10図10）　１点検出された。安山岩製である。

Ｅ類石器

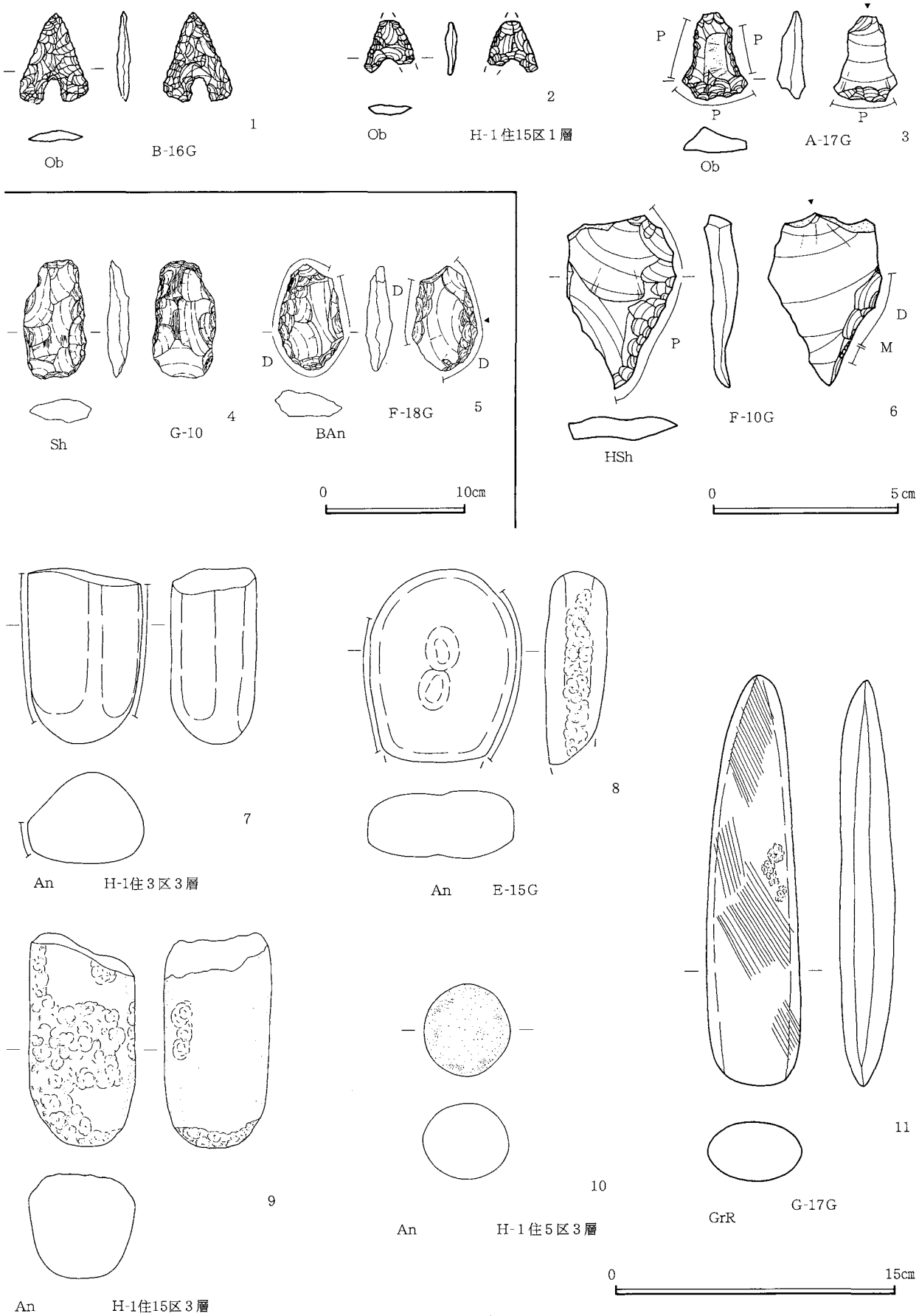
磨製石斧（第10図11）　１点検出された。Ⅲａ形態（大形・断面楕円形）緑色岩類製である。敲打された後、研磨されていることが認められる。

［奈良・平安時代］

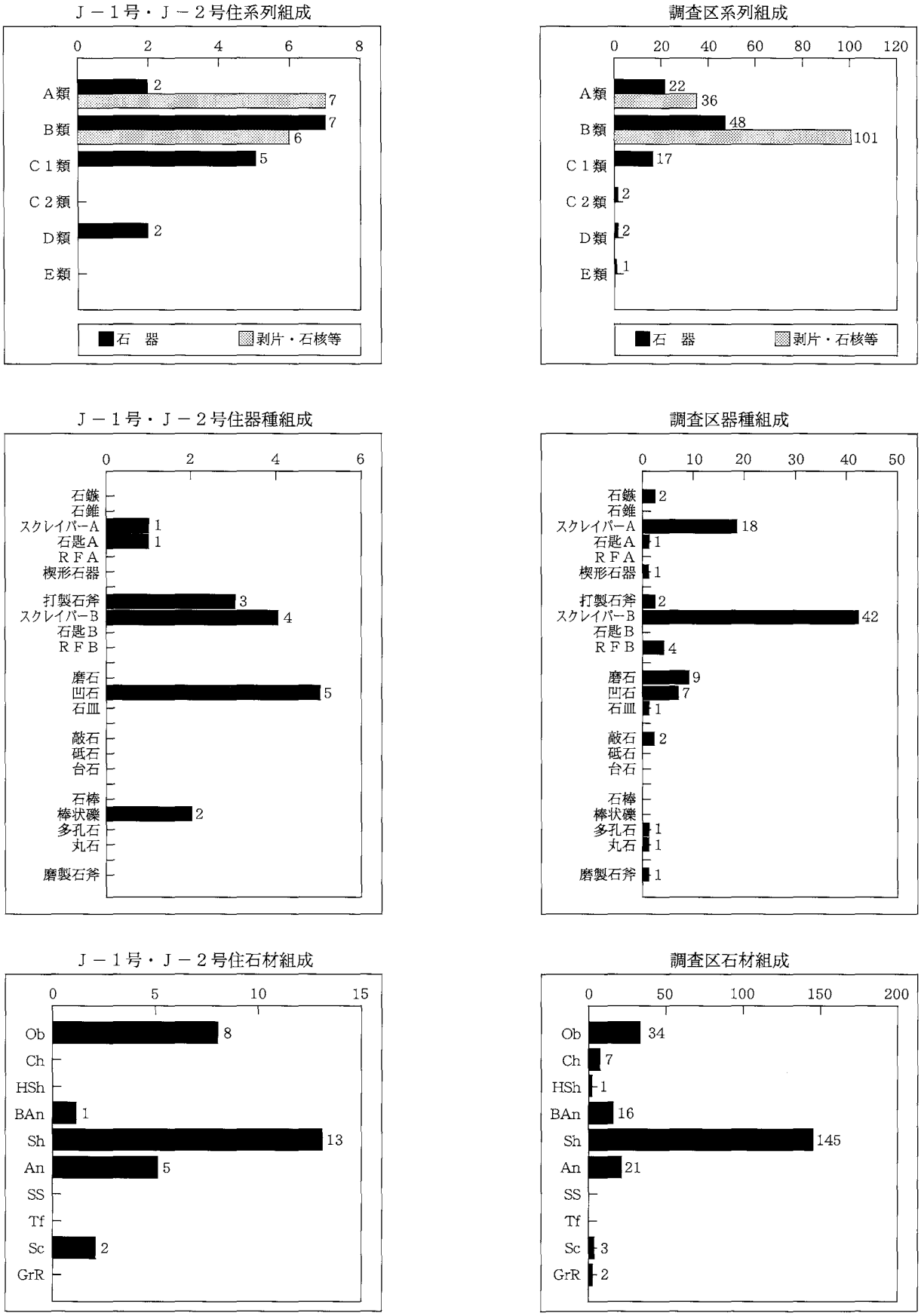
編物石　図示していないが、Ｈ―１号住から２点出土している。



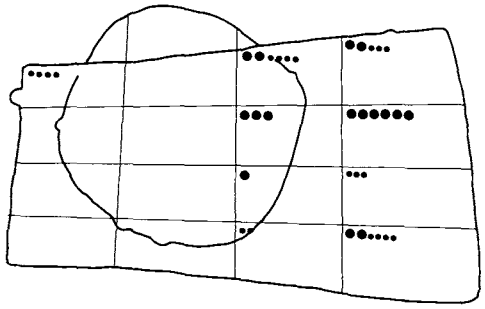
第9図　J－1号・J－2号住居址出土の石器



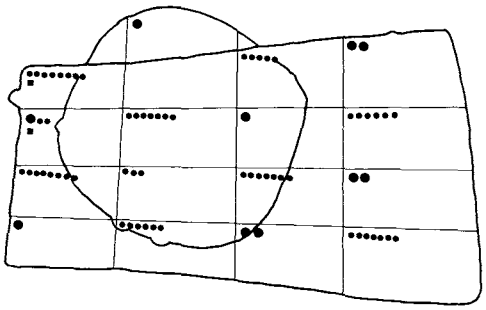
第10図　グリッド出土の石器



第11図　石器系列・器種・石材組成



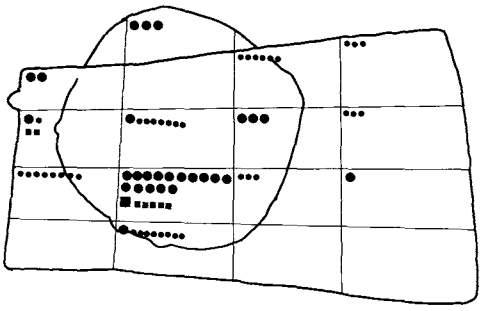
上層



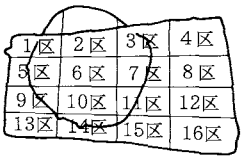
中層

一括

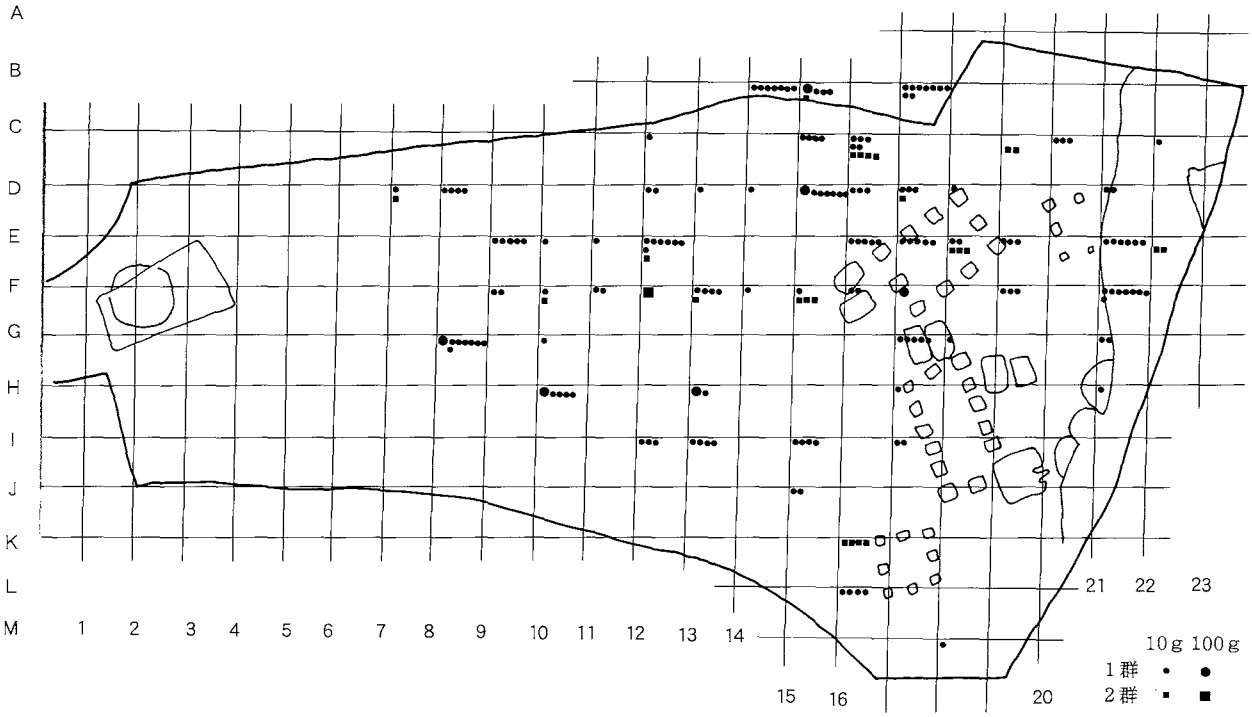
10g 100g
1群
2群



下層

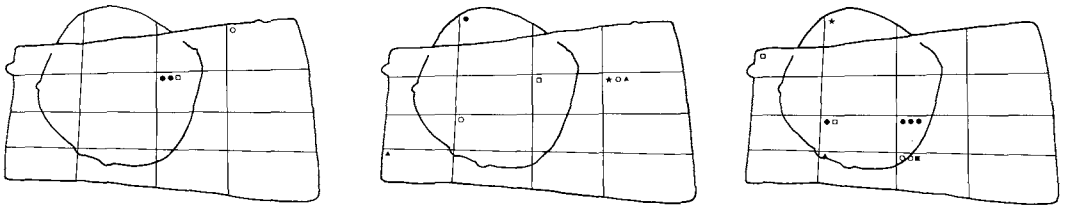


J-1号・J-2号住居址16分割遺物出土状況（土器）



グリッド遺物出土状況（土器）

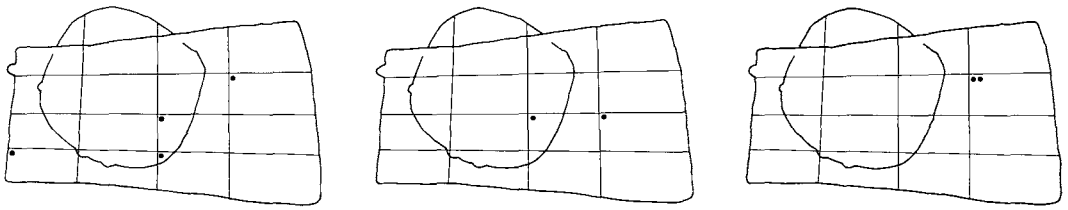
第12図　縄文時代遺物出土状況(1)



一括

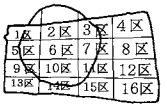
- 石器A類
- 石核A類　FLA類
- 石器B類
- 石核B類　FLB類
- 石器C1類
- 石器C2類
- 石器D類
- 石器E類

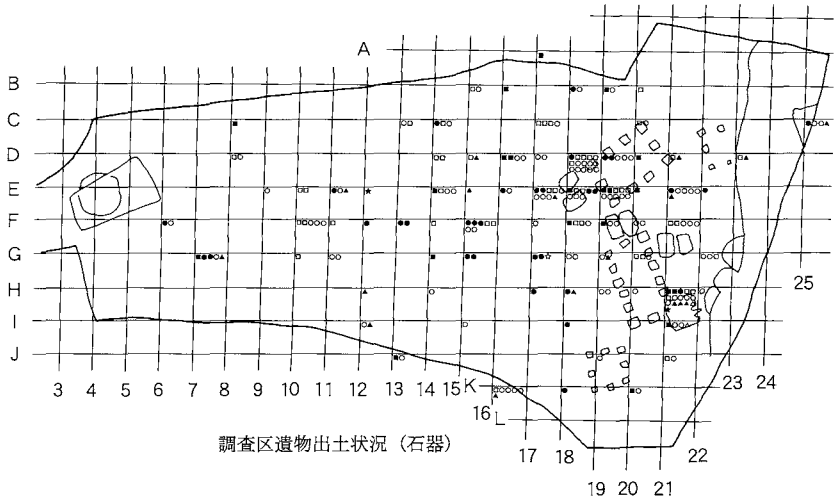
J-1号・J-2号住居址16分割遺物出土状況（石器）



- 一括
- 被熱礫（1個）

J-1号・J-2号住居址16分割遺物出土状況（被熱礫）

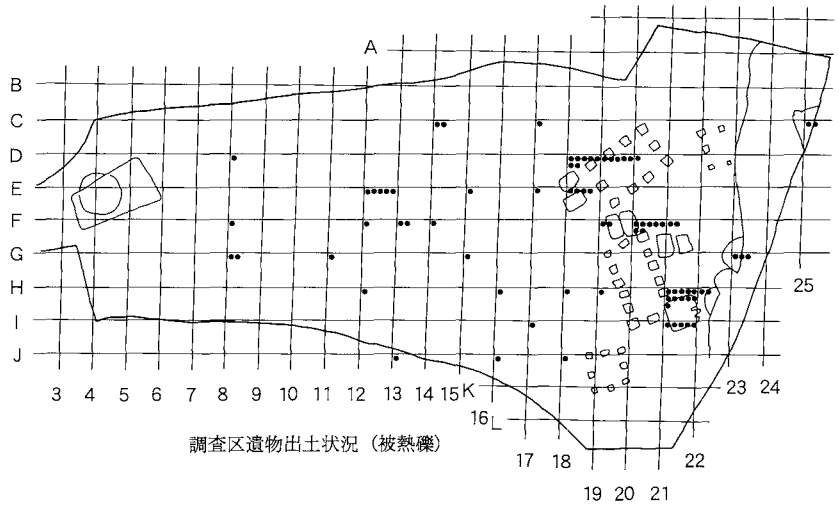




表採

- 石器A類
- 石核A類　FLA類
- 石器B類
- 石核B類　FLB類
- 石器C1類
- 石器C2類
- 石器D類
- 石器E類

調査区遺物出土状況（石器）



表採

- 被熱礫（1個）

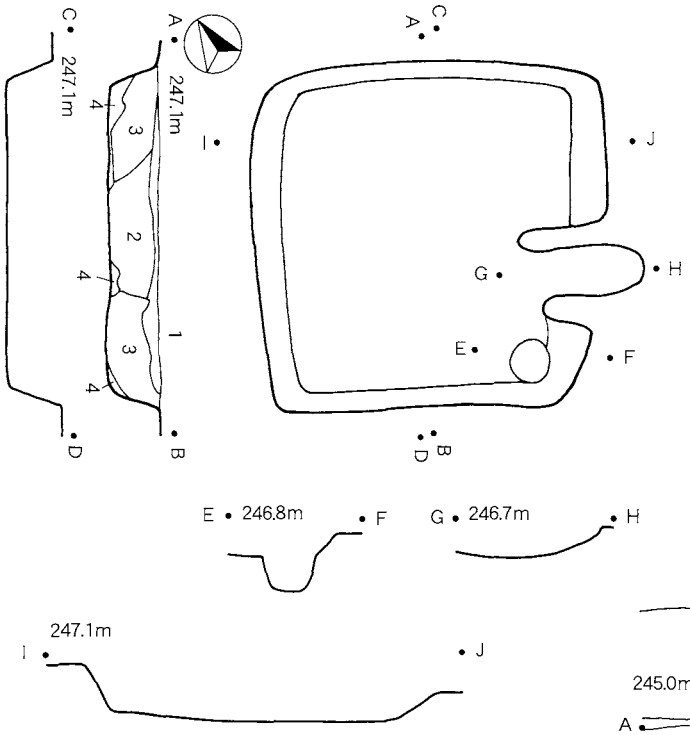
調査区遺物出土状況（被熱礫）

第13図　縄文時代遺物出土状況(2)

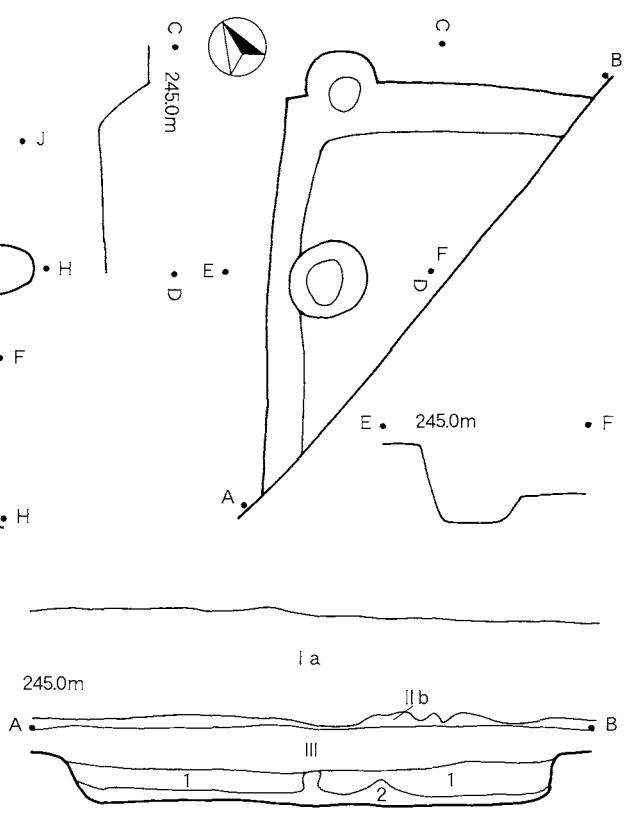
住　居　址	規模（m）	主軸	
H　—　1　号	37.6×36.2	N—125°—W	
住　居　構　造	平面形は隅丸方形であり、掘り込みは確認面から約60cmである。 カマドは住居址東壁のやや南よりに設けられていたが、覆土内に焼土等は確認できなかった。 柱穴は、住居址内及び周辺にも確認されなかったが住居址南東の壁面下に貯蔵穴状の掘り込みを確認した。		
遺物出土状況	比較的多くの遺物を確認した。		

住　居　址	規模（m）	主軸	
H　—　2　号	×		
住　居　構　造	住居址の南側が調査区外に出てしまっているため、遺構の平面形や規模、主軸方向についてはっきりと確認することはできない。 住居址の掘り込みは、確認面から約60cmを計り、住居址西壁下と北西角部分に柱穴状の掘り込みを確認した。		
遺物出土状況	遺物の出土は少数で、いずれも覆土上層部分からの出土である。		

土坑	規模(m)	主　軸	構　　造
D—1	2.8		南側が既存道路によって削平されているが、平面形は円形と思われる。掘り込みは、確認面より約36cmを計り、D—2号土坑と1部重複している。
D—2	3.2		D—1号土坑同様南側が既存道路によって削平されているが、平面形は円形と思われる。掘り込みは確認面より約1mを計り、D—1号・D—2号土坑と1部重複している。
D—3	4.0		D—1号・D—2号土坑同様南側が既存道路によって削平されているが、平面形は隅丸方形と思われる。掘り込みは、確認面より約40cmを計り、D—2号土坑と1部重複している。
D—4	3.2×1.4	N—31°—E	平面形は長方形で、掘り込みは約42cmを計るD—5号土坑と隣接し、ほぼ同様な規模・主軸を示す。
D—5	3.2×1.6	N—31°—E	平面形は長方形で、掘り込みは約20cmを計る
D—6	2.4×1.6	N—75°—W	平面形は長方形で、掘り込みは約24cmを計るD—7号土坑と隣接し、ほぼ同様な規模・主軸を示す。
D—7	2.7×1.8	N—66°—W	平面形は長方形で、掘り込みは約48cmを計る
D—8	2.8×1.8	N—47°—E	平面形は長方形で、掘り込みは約40cmを計るD—9号土坑と隣接し、ほぼ同様な規模・主軸を示す。
D—9	2.3×1.6	N—43°—E	平面形は長方形で、掘り込みは約36cmを計る

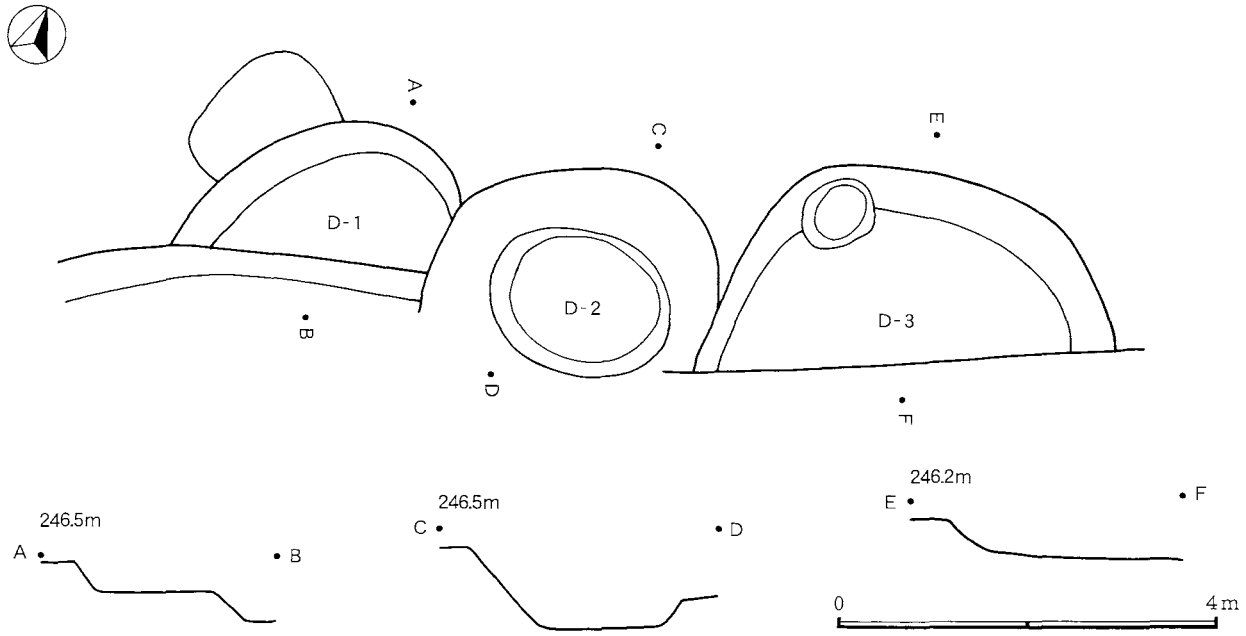


第14図　H－1号住居址実測図

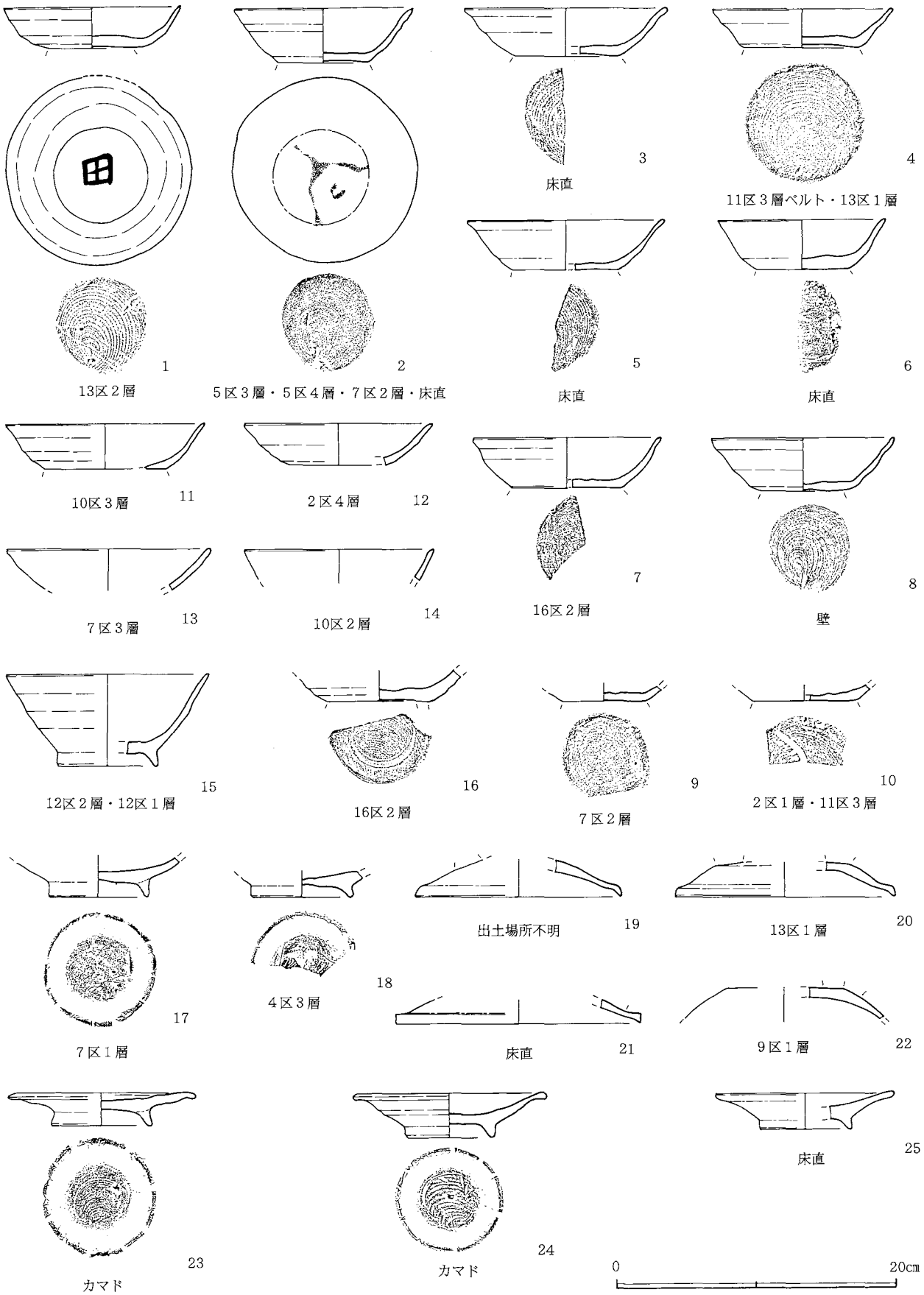


第15図　H－2号住居址実測図

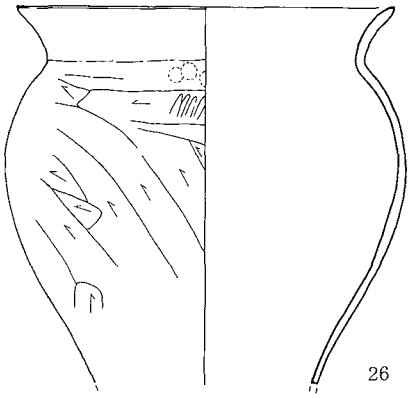
層番	層　名	色調	しまり	粘性	混入物		
					YP	RB	WP
1	暗褐色土層		△	△			△
2	暗褐色土層	1<2	○	△	※	※	△
3	暗褐色土層	2<3	○	△	△	△	△
4	暗黄褐色土層		○	△	△	△	



第16図　D－1号・D－2号・D－3号土坑実測図

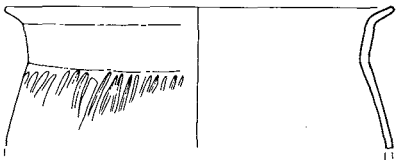


第17図　H－１号住居址出土の遺物(1)



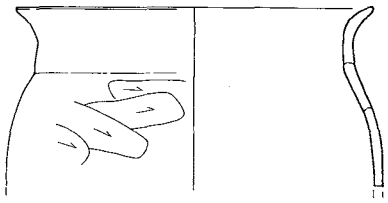
26

カマド



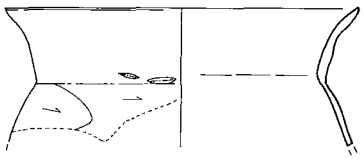
床直

27



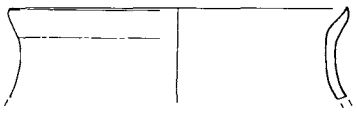
28

床直・カマド



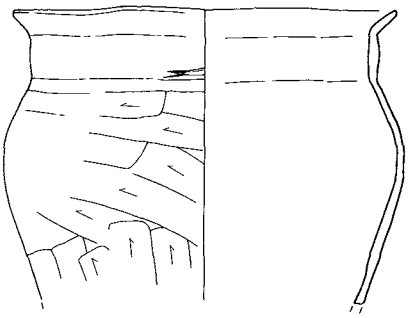
床直

29



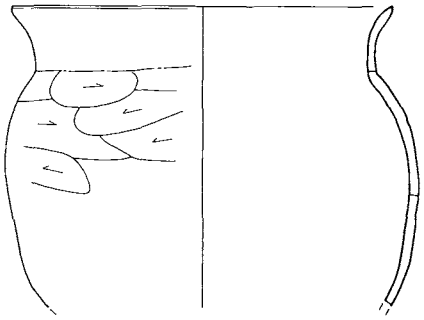
カマド

30



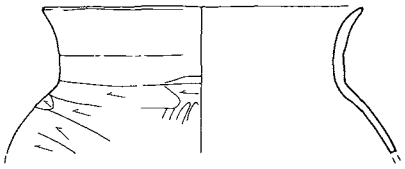
31

カマド



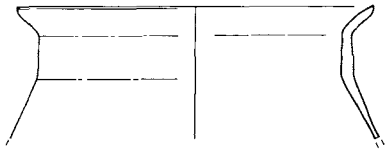
32

カマド・7区2層・8区1層・8区2層



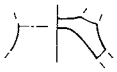
33

カマド・12区3層・11区3層ベルト・15区3層



34

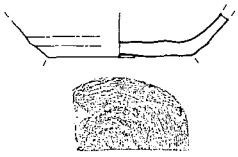
カマド



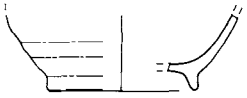
16区3層

35

第18図　H－1号住居址出土物の遺物(2)



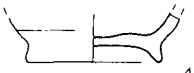
上層　1



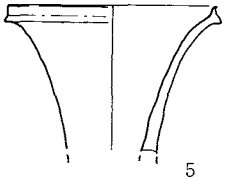
上層　2

3

上層

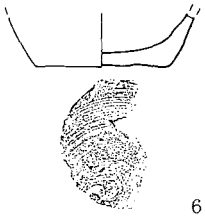


下層　4



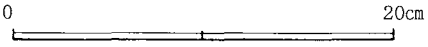
5

上層



6

上層



0　20cm

第19図　H－2号住居址出土の遺物

H－1号住

No.	器種	出土位置	法量	器形・技法等の特徴	胎土・色調・焼成	残存状態・備考
1	須恵器 坏	11区下層 13区中層	口 12.8 底 6.2 高 3.0	内外面共回転横ナデ 底部回転糸切り 外面底部墨書(田)有り	胎 砂粒含む 色 灰色 焼 良	ほぼ完形
2	須恵器 坏	5区下層 7区中層	口 13.0 底 6.8 高 3.9	内外面共回転横ナデ 底部回転糸切り 内面底部墨書(解読不明)有り	胎 砂粒含む 色 にぶい黄色 焼 やや不良	3/4
3	須恵器 坏	床直	口 14.4 底 7.5 高 3.5	内外面共回転横ナデ 底部回転糸切り	胎 砂粒含む 色 灰色 焼 良	1/2
4	須恵器 坏	11区下層	口 13.0 底 8.4 高 2.9	内外面共回転横ナデ 底部回転糸切り 外面底部重ね焼き痕有り	胎 砂粒含む 色 灰色 焼 良	1/2
5	須恵器 坏	床直	口 14.2 底 7.5 高 3.6	内外面共回転横ナデ 底部回転糸切り	胎 砂粒含む 色 灰黄褐色 焼 やや不良	1/4
6	須恵器 坏	床直	口 12.2 底 6.6 高 3.6	内外面共回転横ナデ 底部回転糸切り	胎 砂粒含む 色 灰黄色 焼 良	1/4
7	須恵器 坏	16区中層	口 13.5 底 8.0 高 3.6	内外面共回転横ナデ 底部回転糸切り	胎 砂粒含む 色 灰色 焼 良	1/4
8	須恵器 坏	一括	口 13.2 底 5.9 高 3.8	内外面共回転横ナデ 底部回転糸切り 外面口唇部下重ね焼き痕有り 内面底部火痕有り	胎 砂粒含む 色 灰色 焼 良	完形
9	須恵器 坏	7区中層	口 — 底 1.0 高 6.0	内外面共回転横ナデ 底部回転糸切り 内面渦巻き	胎 砂粒少量含む 色 灰色 焼 良	底部のみ
10	須恵器 坏	11区下層	口 — 底 7.5 高 —	内外面共回転横ナデ 底部回転糸切り 底部外面圧痕有り	胎 砂粒・小石含む 色 にぶい黄橙色 焼 良	底部1/2
11	須恵器 坏	10区下層	口 14.4 底 8.8 高 3.3	内外面共回転横ナデ 底部回転糸切り	胎 砂粒含む 色 灰黄褐色 焼 やや不良	1/6
12	須恵器 坏	2区下層	口 13.6 底 7.0 高 3.0	内外面共回転横ナデ	胎 砂粒含む 色 灰色 焼 良	1/5
13	須恵器 坏	7区下層	口 14.8 底 — 高 —	内外面共回転横ナデ	胎 砂粒少量含む 色 灰色 焼 良	体部の一部
14	須恵器 坏	10区中層	口 — 底 — 高 —	内外面共回転横ナデ 内外面スス吸着	胎 砂粒含む 色 黒色 焼 良	口縁部の一部
15	須恵器 高台付坏	12区中層	口 14.6 底 7.0 高 6.6	内外面共回転横ナデ 底部欠損のため不明	胎 砂粒含む 色 灰黄褐色 焼 不良	1/5
16	須恵器 高台付坏	16区中層	口 — 底 — 高 —	内外面共回転横ナデ 底部回転糸切り後付高台	胎 砂粒含む 色 灰黄色 焼 良	1/5高台欠損
17	須恵器 皿	7区上層	口 — 底 2.8 高 7.2	内外面共回転横ナデ 底部回転糸切り後付高台	胎 砂粒少量含む 色 灰色 焼 良	底部・体部の一部

鍛冶ヶ嶺遺跡遺物観察表(3)

No.	器　種	出土位置	法　量	器形・技法等の特徴	胎土・色調・焼成	残存状態・備考
18	須恵器 高台付坏	4区下層	口　— 底　1.8 高　7.2	内外面共回転横ナデ 底部回転糸切り後付高台	胎 砂粒少量含む 色 灰色 焼 良	底部1/2
19	須恵器 蓋	一括	口　14.8 ツマミ　— 高　2.6	内外面共回転横ナデ 天井部ヘラ削り　ツマミ部欠損	胎 砂粒含む 色 にぶい橙色 焼 良	1/6
20	須恵器 蓋	13区上層	口　15.8 ツマミ　— 高　2.5	内外面共回転横ナデ　回転ヘラ削り調整	胎 砂粒少量含む 色 灰色 焼 良	1/8
21	須恵器 蓋	床直	口　17.6 ツマミ　— 高　—	内外面共回転横ナデ 口縁部重ね焼痕有り	胎 砂粒含む 色 灰色 焼 良	口縁部の一部
22	須恵器 蓋	9区上層	口　— ツマミ　— 高　2.3	内外面共回転横ナデ　回転ヘラ削り調整	胎 砂粒少量含む 色 灰白色 焼 良	体部の一部
23	須恵器 皿	カマド	口　13.6 底　7.2 高　2.4	内外面共回転横ナデ 底部糸切り後付け高台	胎 砂粒含む 色 にぶい黄橙色 焼 良	2/3
24	須恵器 皿	カマド	口　14.1 底　6.0 高　3.3	内外面共回転横ナデ 底部糸切り後付け高台	胎 砂粒含む 色 灰オリーブ 焼 良	ほぼ完形
25	須恵器 皿	床直	口　13.0 底　2.5 高　6.6	内外面共回転横ナデ 底部切り離し後付け高台 (切り方不明)	胎 砂粒少量含む 色 灰色 焼 不良	1/3
26	土師器 甕	カマド	口　20.0 底　— 高　20.0	外面口辺部横ナデ　胴部斜方向ヘラ削り　胴下半部縦方向ヘラ削り 内面横ナデ	胎 砂粒含む 色 橙色 焼 良	1/2
27	土師器 甕	床直	口　20.5 底　— 高　7.5	外面横ナデ　口辺部ヘラ削り 内面横ナデ	胎 砂粒含む 色 赤褐色 焼 良	胴上半部1/3
28	土師器 甕	カマド	口　19.0 底　— 高　9.5	外面口辺部横ナデ　胴上部横方向ヘラ削り 内面横ナデ	胎 砂粒多く含む 色 にぶい橙色 焼 良	口辺部から胴上部の一部
29	土師器 甕	床直	口　19.0 底　— 高　7.2	外面口辺部横ナデ　胴上部横方向ヘラ削り 内面横ナデ	胎 砂粒多く含む 色 明赤褐色 焼 良	口辺部から胴上部の一部
30	土師器 甕	カマド	口　18.0 底　— 高　4.8	内外面共横ナデ	胎 砂粒多く含む 色 明赤褐色 焼 良	口辺部の一部
31	土師器 甕	カマド	口　20.2 底　— 高　—	外面口辺部横ナデ　胴部ヘラ削り 内面横ナデ	胎 砂粒含む 色 にぶい黄橙色 焼 良	口縁部から胴中央部の1/4
32	土師器 甕	カマド 7.8区中層	口　20.0 底　— 高　16.0	外面口辺部横ナデ　胴上部横方向ヘラ削り 内面横ナデ	胎 砂粒多く含む 色 赤褐色 焼 良	口縁部から胴上部の一部
33	土師器 甕	カマド 11.12.15区 下層	口　16.8 底　— 高　7.7	外面口辺部横ナデ　胴部斜方向ヘラ削り 内面横ナデ	胎 砂粒含む 色 赤褐色 焼 良	胴上半部1/2
34	土師器 甕	カマド	口　19.0 底　— 高　7.0	外面口辺部横ナデ　頸部横方向ヘラ削り 内面横ナデ	胎 砂粒多く含む 色 明赤褐色 焼 良	口辺部から頸部の一部

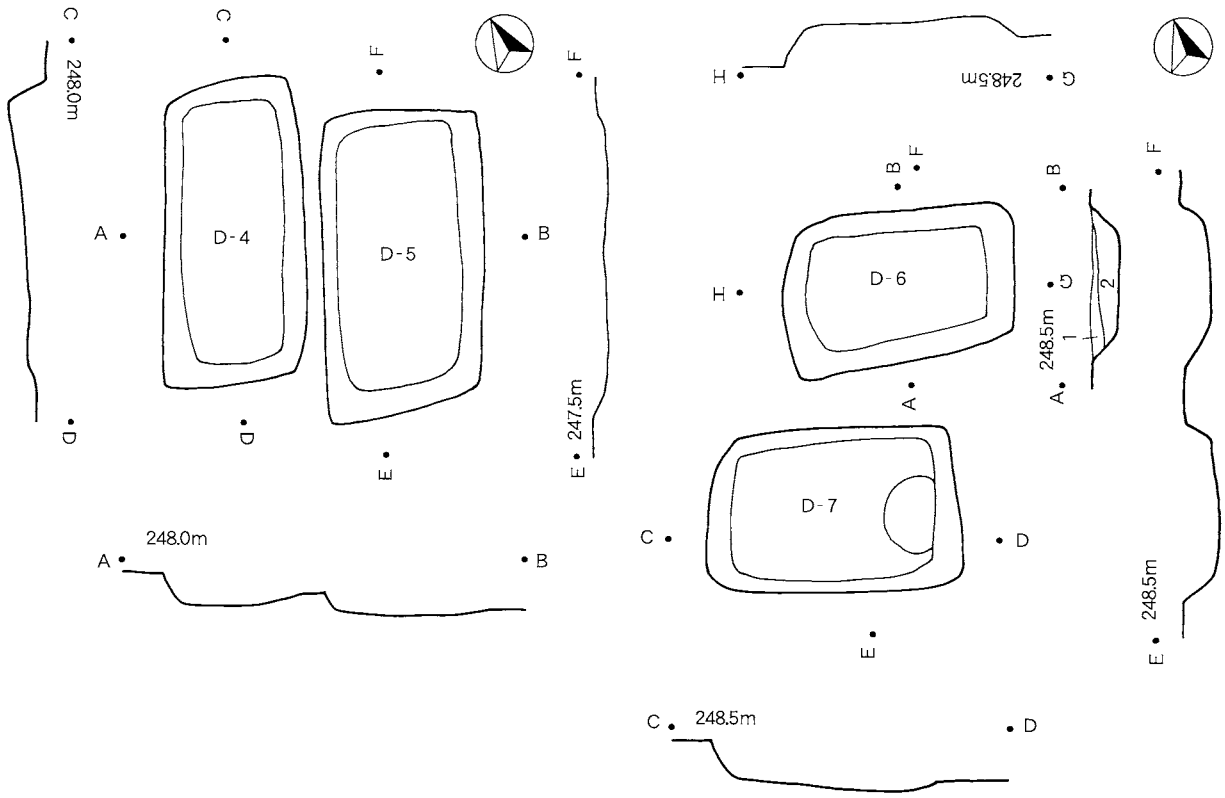
鍛冶ヶ嶺遺跡遺物観察表(4)

No.	器　種	出土位置	法　量	器形・技法等の特徴	胎土・色調・焼成	残存状態・備考
35	土　師　器 台　付　甕	16区下層	口　— 底　— 高　2.2	内外面共横ナデ	胎 砂粒含む 色 明赤褐色 焼 良	底部と脚台部の一部

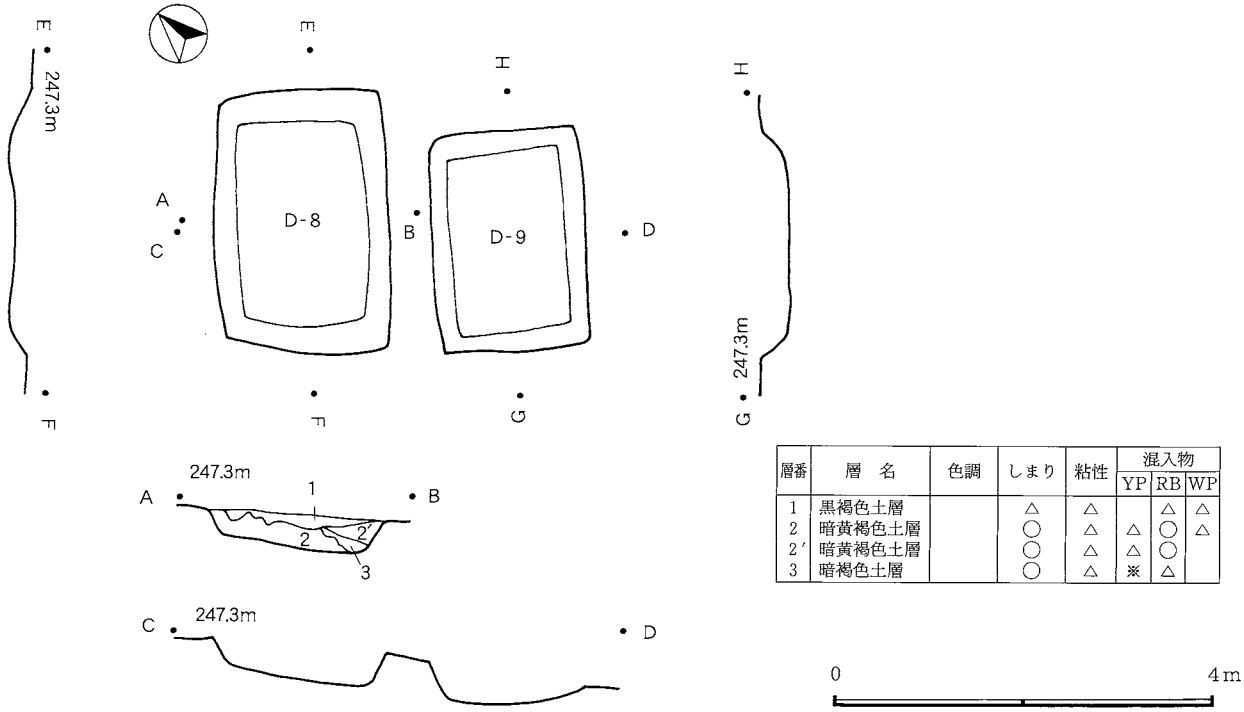
H－2号住

No.	器　種	出土位置	法　量	器形・技法等の特徴	胎土・色調・焼成	残存状態・備考
1	須　恵　器 坏	一括	口　— 底　7.8 高　—	内外面共回転横ナデ 底部回転糸切り	胎 砂粒含む 色 灰色 焼 良	底部1/4
2	須　恵　器 高台付坏	上層	口　12.0 底　7.7 高　4.0	内外面共回転横ナデ	胎 砂粒含む 色 灰色 焼 良	1/10
3	須　恵　器 高台付坏	上層	口　— 底　— 高　—	内外面共回転横ナデ 底部回転糸切り後付け高台	胎 砂粒含む 色 灰黄色 焼 やや不良	底部1/2
4	須　恵　器 高台付坏	下層	口　— 底　7.0 高　—	内外面共回転横ナデ 底部回転糸切り後付け高台	胎 砂粒含む 色 灰色 焼 良	底部1/5
5	須　恵　器 長　頸　瓶	上層	口　10.8 底　— 高　—	内外面共回転横ナデ 内外面に自然釉付着	胎 砂粒含む 色 黒褐色 焼 良	頸部1/4
6	須　恵　器 坏	上層	口　— 底　7.0 高　—	内外面共回転横ナデ 底部回転糸切り	胎 砂粒含む 色 にぶい赤褐色 焼 良	底部

鍛冶ヶ嶺遺跡遺物観察表(5)

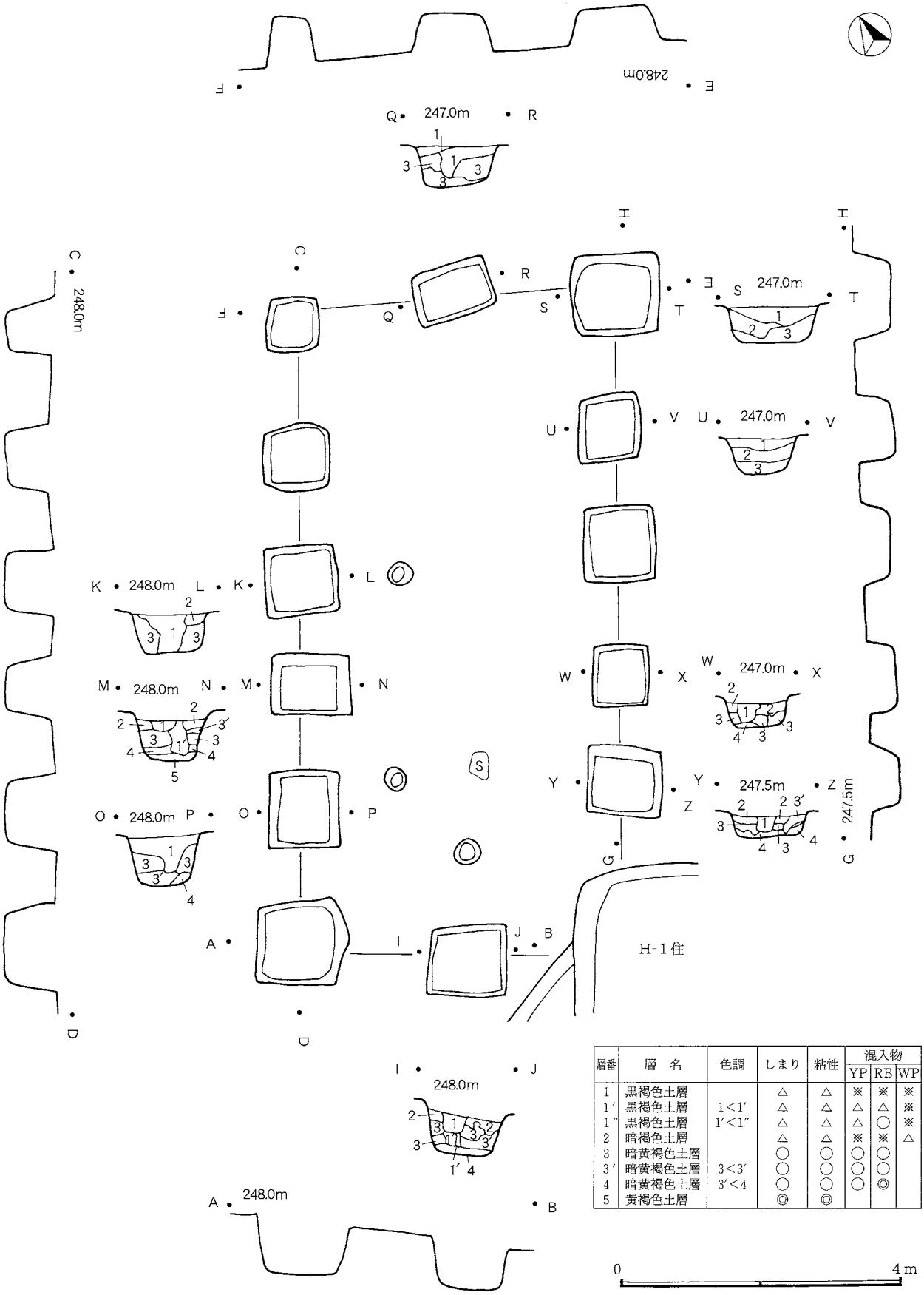


層番	層　名	色調	しまり	粘性	混入物		
					YP	RB	WP
1	黒褐色土層		△	△		△	△
2	暗黄褐色土層		○	△	△	○	△



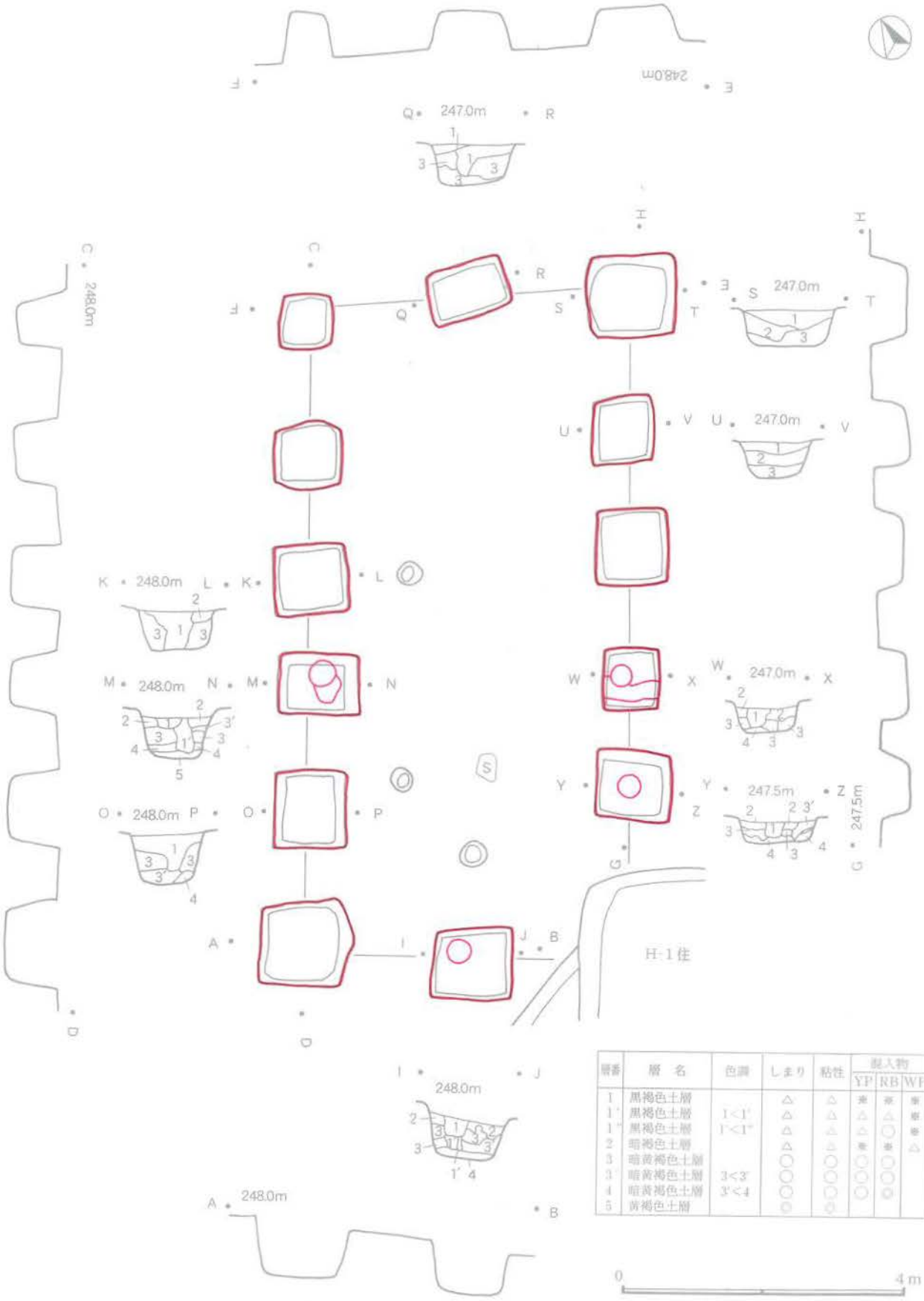
層番	層　名	色調	しまり	粘性	混入物		
					YP	RB	WP
1	黒褐色土層		△	△		△	△
2	暗黄褐色土層		○	△	△	○	△
2′	暗黄褐色土層		○	△	△	○	
3	暗褐色土層		○	△	※	△	

第20図　D－4号・D－5号・D－6号・D－7号・D－8号・D－9号土坑実測図



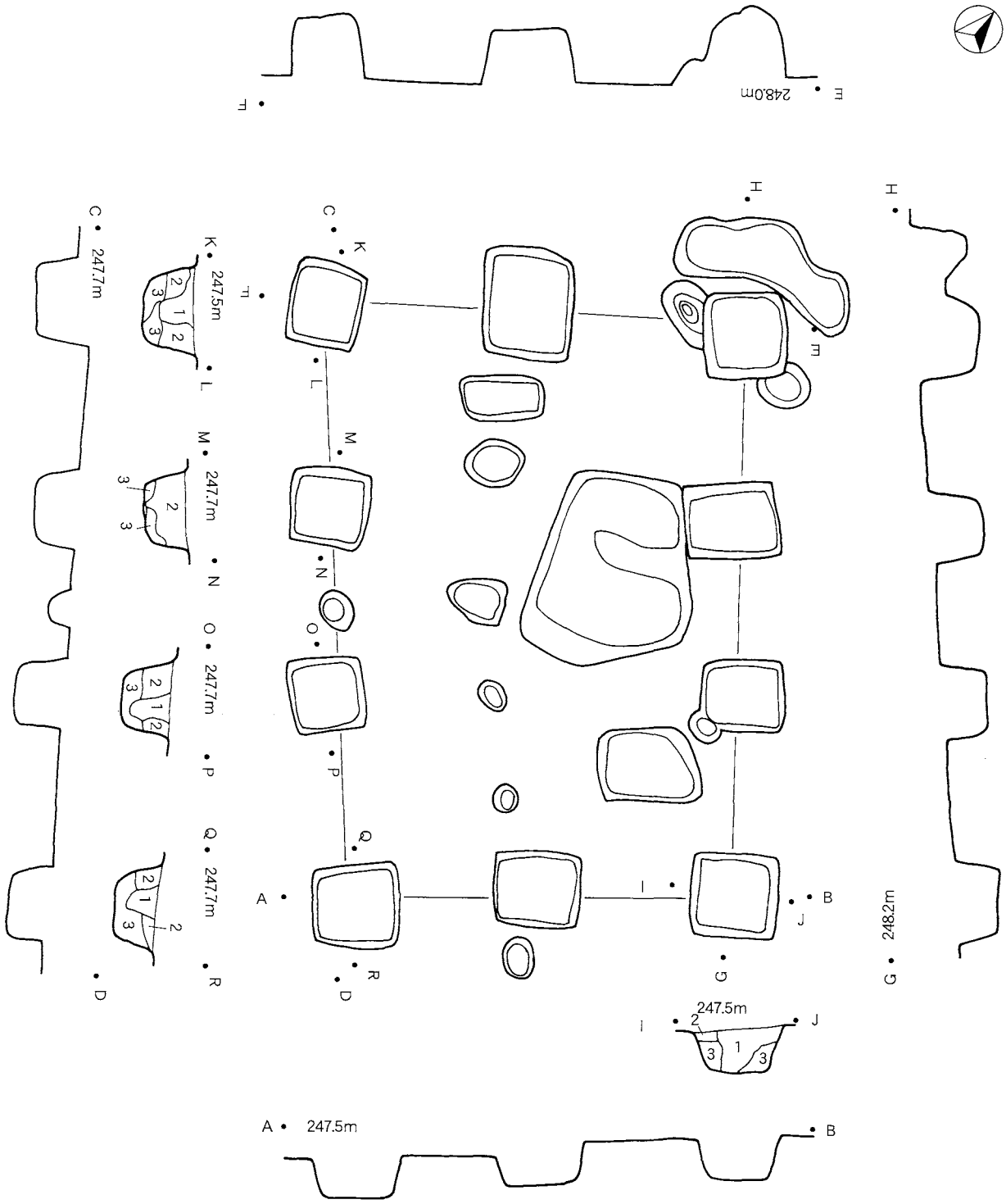
層番	層　名	色調	しまり	粘性	混入物		
					YP	RB	WP
1	黒褐色土層		△	△	※	※	※
1′	黒褐色土層	1<1′	△	△	△	△	※
1″	黒褐色土層	1′<1″	△	△	△	○	※
2	暗褐色土層		△	△	※	※	△
3	暗黄褐色土層		○	○	○	○	
3′	暗黄褐色土層	3<3′	○	○	○	○	
4	暗黄褐色土層	3′<4	○	○	○	◎	
5	黄褐色土層		◎	◎			

第21図　T－1号掘立柱建物址実測図



層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 YP	混入物 RB	混入物 WP
1	黒褐色土層		△	△	◉	◉	◉
1'	黒褐色土層	1<1'	△	△	△	△	◉
1"	黒褐色土層	1'<1"	△	△	△	○	◉
2	暗褐色土層		△	△	◉	◉	△
3	暗黄褐色土層		○	○	○	○	
3'	暗黄褐色土層	3<3'	○	○	○	○	
4	暗黄褐色土層	3'<4	○	○	○	◎	
5	黄褐色土層		◎	◎			

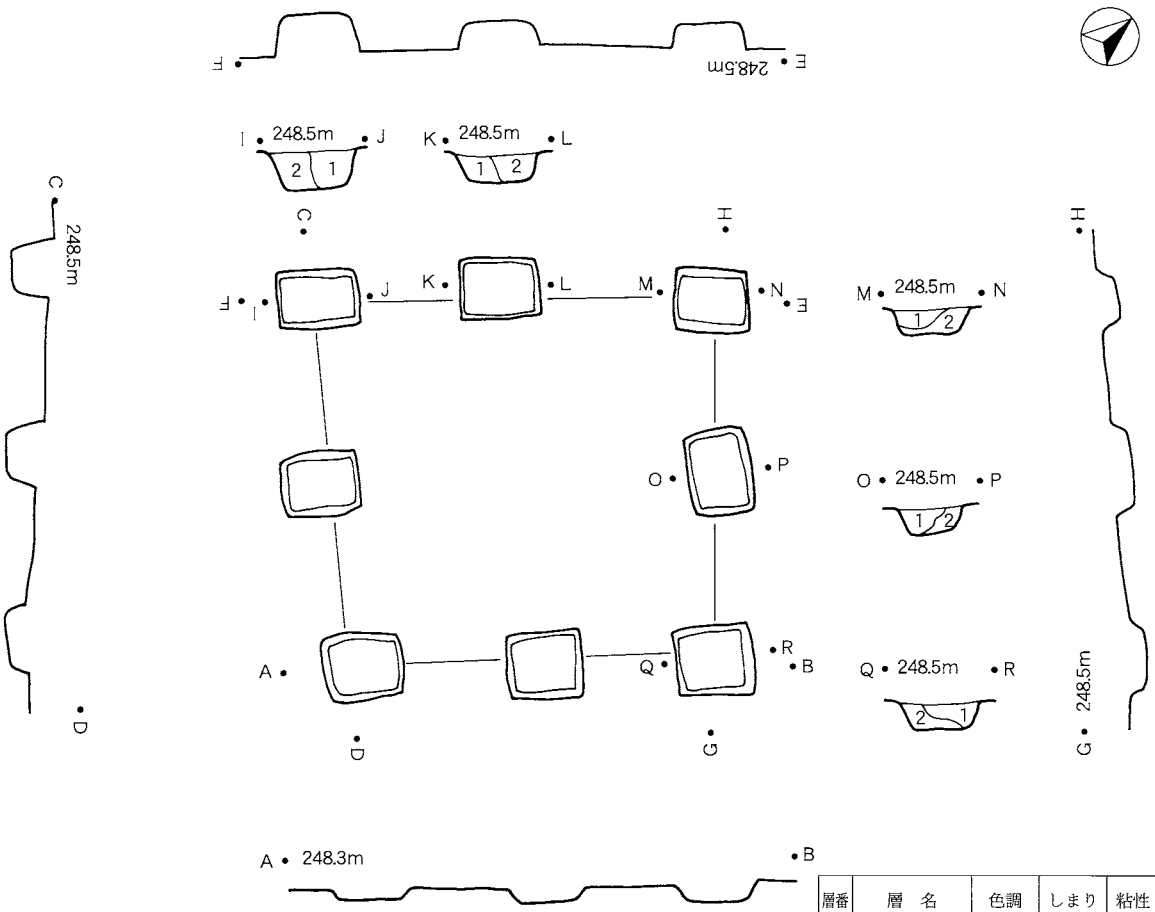
第21図　T－1号掘立柱建物址実測図



層番	層　名	色調	しまり	粘性	混入物		
					YP	RB	WP
1	黒褐色土層		△	△	※	※	※
2	暗褐色土層		△	△	※	※	△
3	暗黄褐色土層		○	○	○	○	

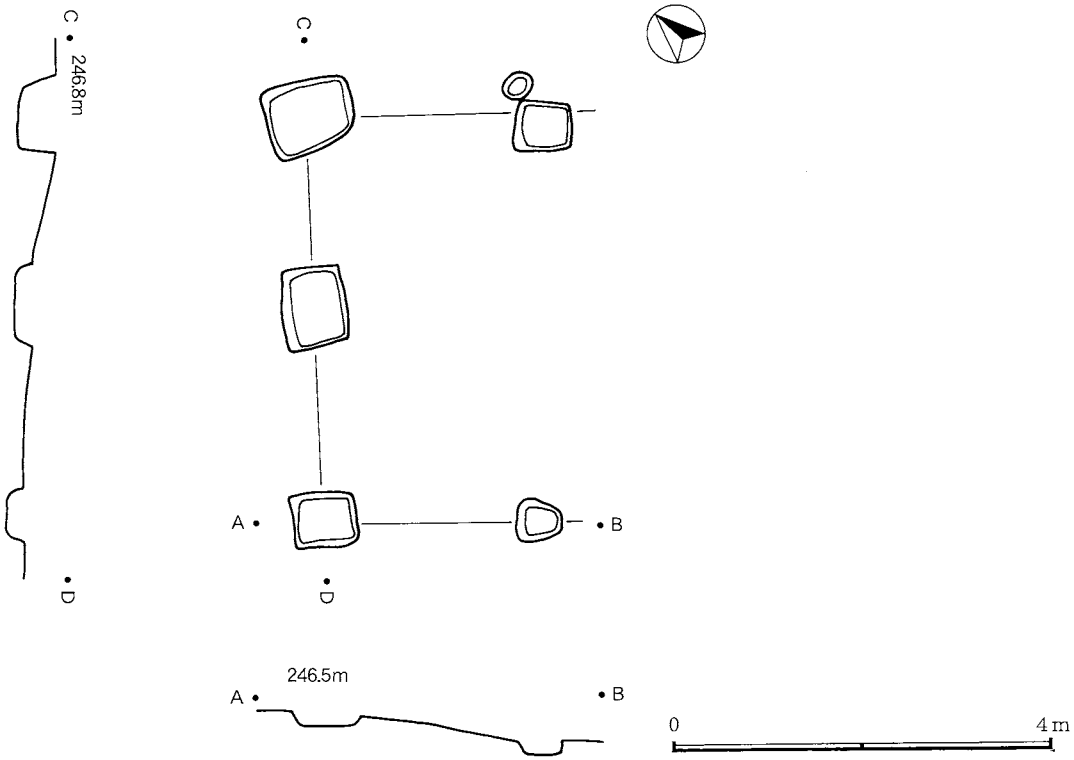
0　　4m

第22図　T－2号掘立柱建物址実測図



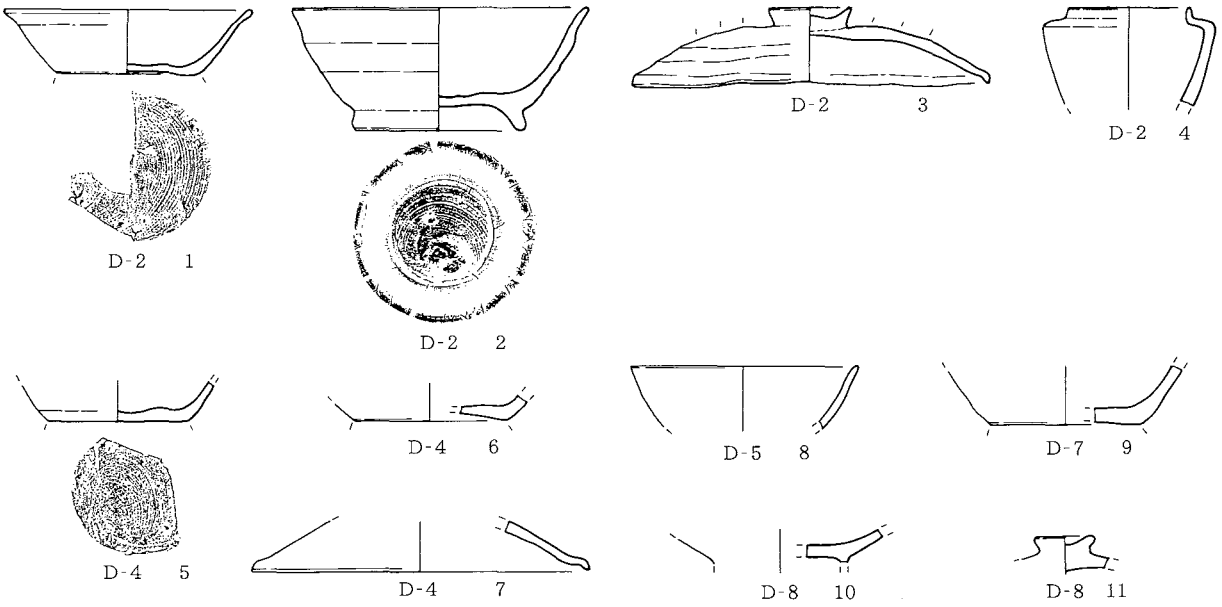
第23図　T－3号掘立柱建物址実測図

層番	層　名	色調	しまり	粘性	混入物		
					YP	RB	WP
1	黒褐色土層		△	△	※	※	※
2	暗褐色土層		△	△	※	※	△

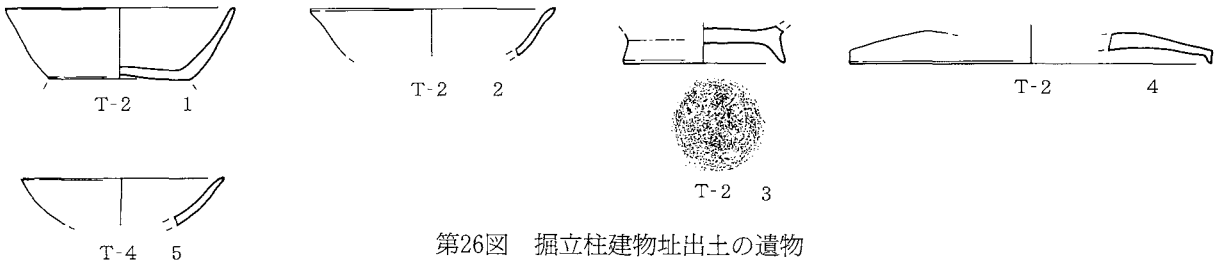


第24図　T－4号掘立柱建物址実測図

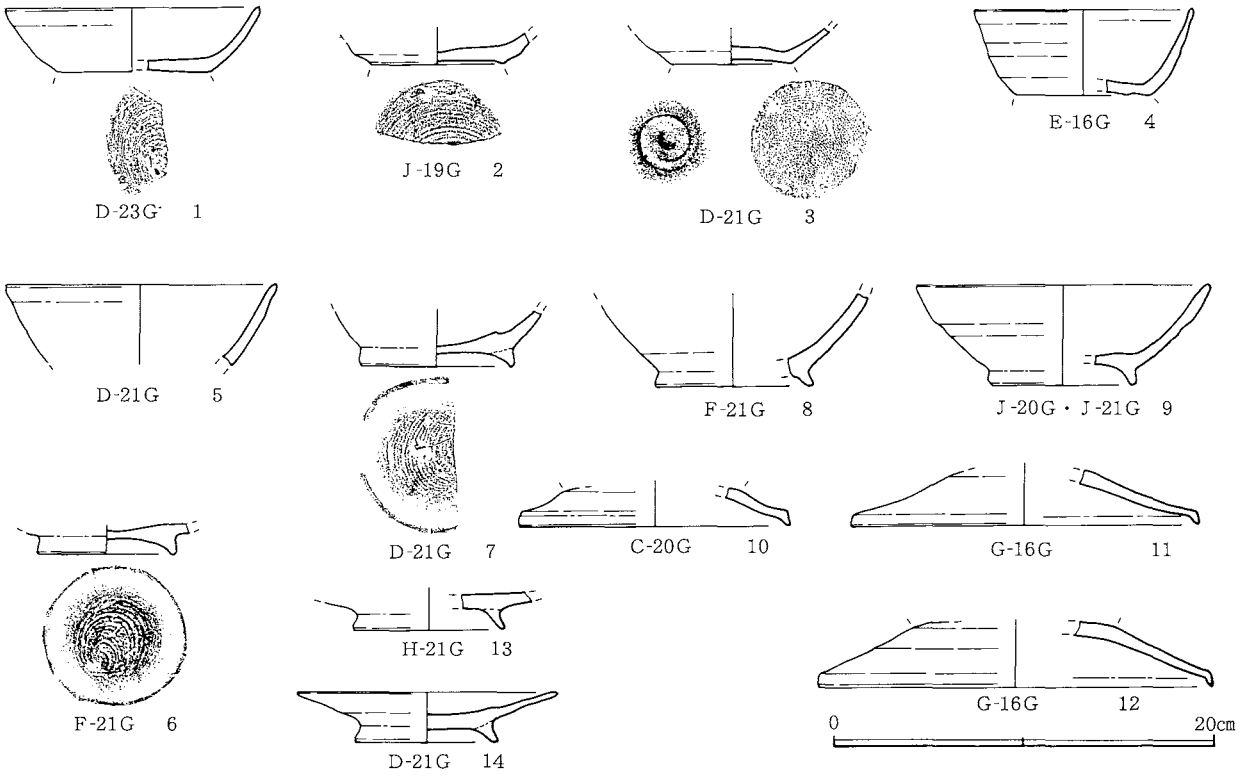
掘立柱建物址	規　　格	主軸方向	備　　考
T－1	2間×5間	N－30°－E	柱穴の平面形は長方形から正方形で、一辺の長さの平均は約1mを計る。柱穴の掘り込みはしっかりとしており、最も深いもので80cmを計る。また、柱穴には柱痕が確認できるものが幾つかあり、30cm～40cm程の柱が存在していたことが確認された。
T－2	2間×3間	N－46°－W	T－1号掘立柱建物址同様柱穴の平面形は長方形から正方形で、一辺の長さも1m前後でほぼ同一の規格を示す。柱穴の掘り込みもしっかりとしていて、最も深いもので80cmを計る。柱穴内の柱痕もT－1号掘立柱建物址程明確ではないが、土層断面の観察から30cm程の柱が存在していた事が確認される。
T－3	2間×2間	N－36°－E	柱穴の平面形は長方形から正方形で一辺の長さ1m前後とT－1号・T－2号掘立柱建物址とほぼ同一の規格を示す。しかし、掘り込みは最も深いもので40cmとT－1号・T－2号に比べると浅い。また、柱痕の確認はできなかった。
T－4	2間×	N－48°－E	柱穴の平面形は長方形から正方形で一辺の長さの平均は約70cmを計る。遺構の東側が削平されていて、柱穴の確認はできなかったが、T－3号掘立柱建物址同様2間×3間の規格を持つと思われる。柱穴の掘り込みは、最も深いもので40cmを計る。



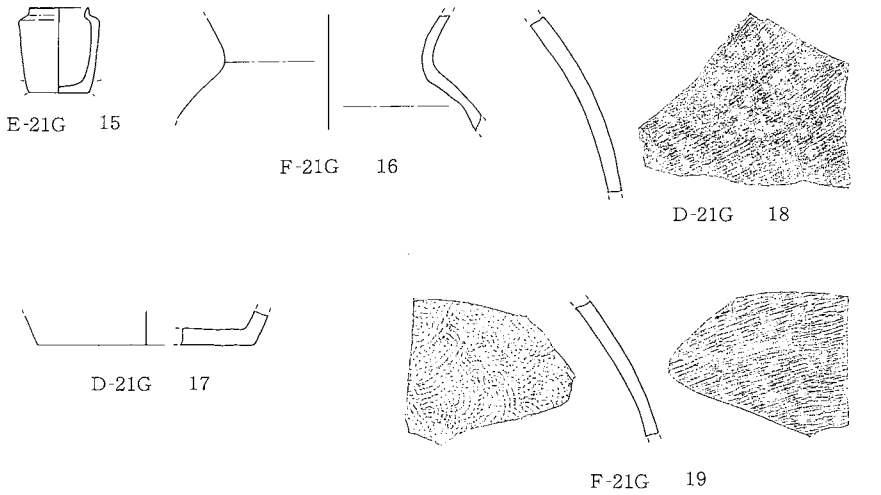
第25図　土坑出土の遺物



第26図　掘立柱建物址出土の遺物



第27図　グリッド出土の遺物(1)



第28図　グリッド出土の遺物(2)

土　坑

No.	器　種	出土位置	法　量	器形・技法等の特徴	胎土・色調・焼成	残存状態・備考
1	須恵器 坏	D－2	口　13.0 底　7.8 高　3.4	内外面共回転横ナデ 底部回転糸切り　内面渦巻き 底部外面圧痕有り	胎 砂粒含む 色 灰色 焼 良	1/3
2	須恵器 高台付坏	D－2	口　15.6 底　8.8 高　6.5	内外面共回転横ナデ 底部回転糸切り後付け高台	胎 砂粒少量含む 色 浅黄色 焼 良	ほぼ完形
3	須恵器 蓋	D－2	口　18.8 ツマミ 3.8 高　4.1	内外面共回転横ナデ 外面天井部回転ヘラ削り及び回転糸切り後ツマミ貼付 中央突出リング状ツマミ　内外面重ね焼き痕有り	胎 砂粒含む 色 灰白色 焼 良	2/3 歪み有り
4	須恵器 小型壺	D－2	口　6.4 底　— 高　5.2	内外面共回転横ナデ	胎 砂粒少量含む 色 灰色 焼 良	1/4
5	須恵器 坏	D－4	口　— 底　7.4 高　—	内外面共回転横ナデ 底部回転糸切り 内面渦巻き	胎 砂粒含む 色 灰色 焼 やや不良	1/7
6	須恵器 坏	D－4	口　— 底　8.0 高　1.3	内外面共回転横ナデ 底部回転ヘラ切り	胎 砂粒少量含む 色 灰色 焼 良	底部1/3
7	須恵器 蓋	D－4	口　18.0 ツマミ　— 高　2.5	内外面共回転横ナデ	胎 砂粒少量含む 色 灰白色 焼 良	破片
8	須恵器 坏	D－5	口　12.0 底　— 高　—	内外面共回転横ナデ	胎 砂粒少量含む 色 灰色 焼 良	破片
9	須恵器 坏	D－7	口　— 底　8.0 高　3.0	内外面共回転横ナデ 底部回転ヘラ切り 内面スス吸着	胎 砂粒少量含む 色 灰白色 焼 良	底部と体部の一部
10	須恵器 高台付坏	D－8	口　— 底　7.0 高　1.7	内外面共回転横ナデ 底部回転ヘラ切り後付け高台	胎 砂粒少量含む 色 灰色 焼 やや不良	破片
11	須恵器 蓋	D－8	口　— ツマミ 3.2 高　1.8	内外面共回転横ナデ リング状ツマミ貼付	胎 砂粒少量含む 色 灰色 焼 良	ツマミ部

鍛冶ヶ嶺遺跡観察表(6)

掘立柱建物址

No.	器　種	出土位置	法　量	器形・技法等の特徴	胎土・色調・焼成	残存状態・備考
1	須恵器 坏	T－2	口 12.0 底 7.6 高 3.8	内外面共回転横ナデ 底部回転ヘラ切り	胎 砂粒少量含む 色 灰色 焼 良	破片
2	須恵器 坏	T－2	口 13.0 底 — 高 —	内外面共回転横ナデ	胎 砂粒少量含む 色 灰色 焼 良	破片
3	須恵器 高台付坏	T－2	口 — 底 6.5 高 —	内外面共回転横ナデ 底部回転糸切り後付け高台	胎 砂粒含む 色 灰色 焼 良	底部3/5
4	須恵器 蓋	T－2	口 19.4 ツマミ — 高 1.6	内外面共回転横ナデ 天井部ヘラ削り	胎 砂粒少量含む 色 灰色 焼 良	体部の一部
5	須恵器 坏	T－4	口 10.8 底 — 高 —	内外面共回転横ナデ	胎 砂粒少量含む 色 にぶい黄橙色 焼 やや不良	破片

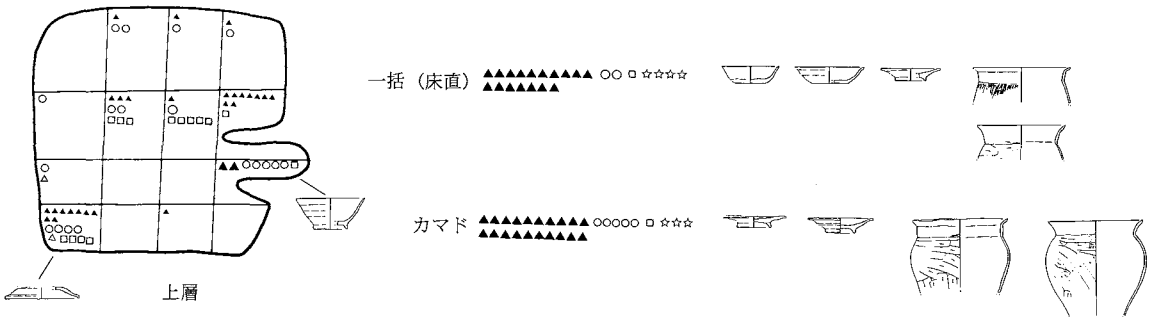
グリッド

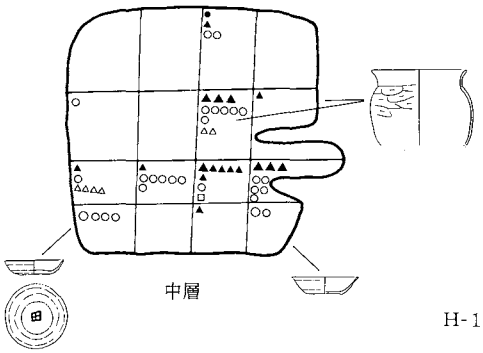
No.	器　種	出土位置	法　量	器形・技法等の特徴	胎土・色調・焼成	残存状態・備考
1	須恵器 坏	D—23	口 13.5 底 8.0 高 3.4	内外面共回転横ナデ 底部回転糸切り	胎 砂粒含む 色 灰白色 焼 良	1/4
2	須恵器 坏	J—19	口 — 底 7.0 高 1.6	内外面共回転横ナデ 底部回転糸切り	胎 砂粒少量含む 色 灰色 焼 良	底部1/2
3	須恵器 坏	D—21	口 — 底 6.5 高 —	内外面共回転横ナデ 底部回転糸切り 内面渦巻き	胎 砂粒含む 色 褐灰色 焼 良	1/3
4	須恵器 坏	E—16	口 13.4 底 8.8 高 4.6	内外面共回転横ナデ 底部回転ヘラ切り	胎 細砂粒含む 色 灰色 焼 良	1/4
5	須恵器 坏	D—21	口 14.2 底 — 高 —	内外面共回転横ナデ 内面スス吸着	胎 砂粒含む 色 にぶい黄橙色 焼 良	口縁部から体部 1/8
6	須恵器 皿	F—21	口 — 底 7.2 高 —	内外面共回転横ナデ 底部回転糸切り後付高台	胎 砂粒含む 色 灰色 焼 良	底部のみ 歪み有り
7	須恵器 高台付坏	D—21	口 — 底 8.0 高 3.0	内外面共回転横ナデ 底部回転糸切り後付け高台	胎 砂粒少量含む 色 灰色 焼 良	底部と体部の一部
8	須恵器 坏	F—21	口 — 底 8.2 高 —	内外面共回転横ナデ 底部切り離し後付け高台(底部切り離し不明)内面スス吸着	胎 砂粒含む 色 にぶい黄橙色 焼 良	底部から体部の一部
9	須恵器 高台付坏	J—20 J—21	口 15.6 底 7.6 高 5.4	内外面共回転横ナデ 底部回転糸切り後付け高台	胎 砂粒少量含む 色 灰黄色 焼 良	1/4
10	須恵器 蓋	C—20	口 14.2 ツマミ — 高 —	内外面共回転横ナデ ツマミ欠損	胎 砂粒含む 色 灰色 焼 良	1/5
11	須恵器 蓋	G—16	口 16.4 ツマミ — 高 —	内外面共回転横ナデ	胎 砂粒含む 色 灰色 焼 良	1/10

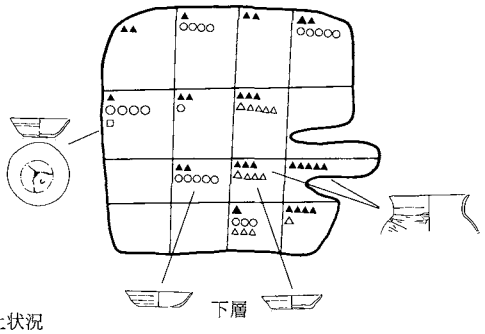
鍛冶ヶ嶺遺跡観察表(7)

No.	器　種	出土位置	法　量	器形・技法等の特徴	胎土・色調・焼成	残存状態・備考
12	須　恵　器 蓋	G—16	口　20.8 ツマミ　— 高　—	内外面共回転横ナデ 外面天井部回転ヘラ削り	胎 砂粒含む 色 灰色 焼 良	1/4
13	須　恵　器 皿	H—21	口　— 底　7.8 高　—	内外面共回転横ナデ 底部切り離し後付け高台(底部切り離し不明)	胎 砂粒含む 色 灰色 焼 良	1/8
14	須　恵　器 皿	D—21	口　13.8 底　7.4 高　2.7	内外面共回転横ナデ 底部回転糸切り後付け高台	胎 砂粒含む 色 灰色 焼 やや不良	1/6
15	須　恵　器 小　型　壺	E—21	口　4.6 底　4.6 高　6.5	内外面共回転横ナデ 胴下部回転ヘラ削り　底部回転糸切り　内面及び外面口縁部に自然灰釉付着	胎 砂粒少量含む 色 褐灰色 焼 良	1/2
16	須　恵　器 甕	F—21	口　— 底　— 高　—	内外面共回転横ナデ	胎 砂粒含む 色 黄灰色 焼 良	頸部から体部 1/4
17	須　恵　器 甕	D—21	口　— 底　16.8 高　—	内外面共回転横ナデ	胎 砂粒含む 色 灰黄色 焼 良	底部2/5
18	須　恵　器 甕	D—21	口　— 底　— 高　—	外面たたき痕 内面横ナデ	胎 砂粒含む 色 灰黄色 焼 良	胴部破片
19	須　恵　器 甕	F—21	口　— 底　— 高　—	外面平行たたき痕 内面あて具痕	胎 砂粒含む 色 暗灰黄色 焼 良	胴部破片

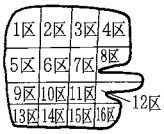
鍛冶ヶ嶺遺跡観察表(8)

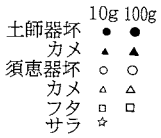






H-1号住居址16分割遺物出土状況





グリッド遺物出土状況

第29図　遺物出土状況

Ⅶ　成果と問題点

今回の調査により縄文時代、奈良・平安時代の遺構が確認された。遺構はいずれも丘陵の縁辺付近に存在し、中央の平坦部分からは時期不明のピットを多数確認した。

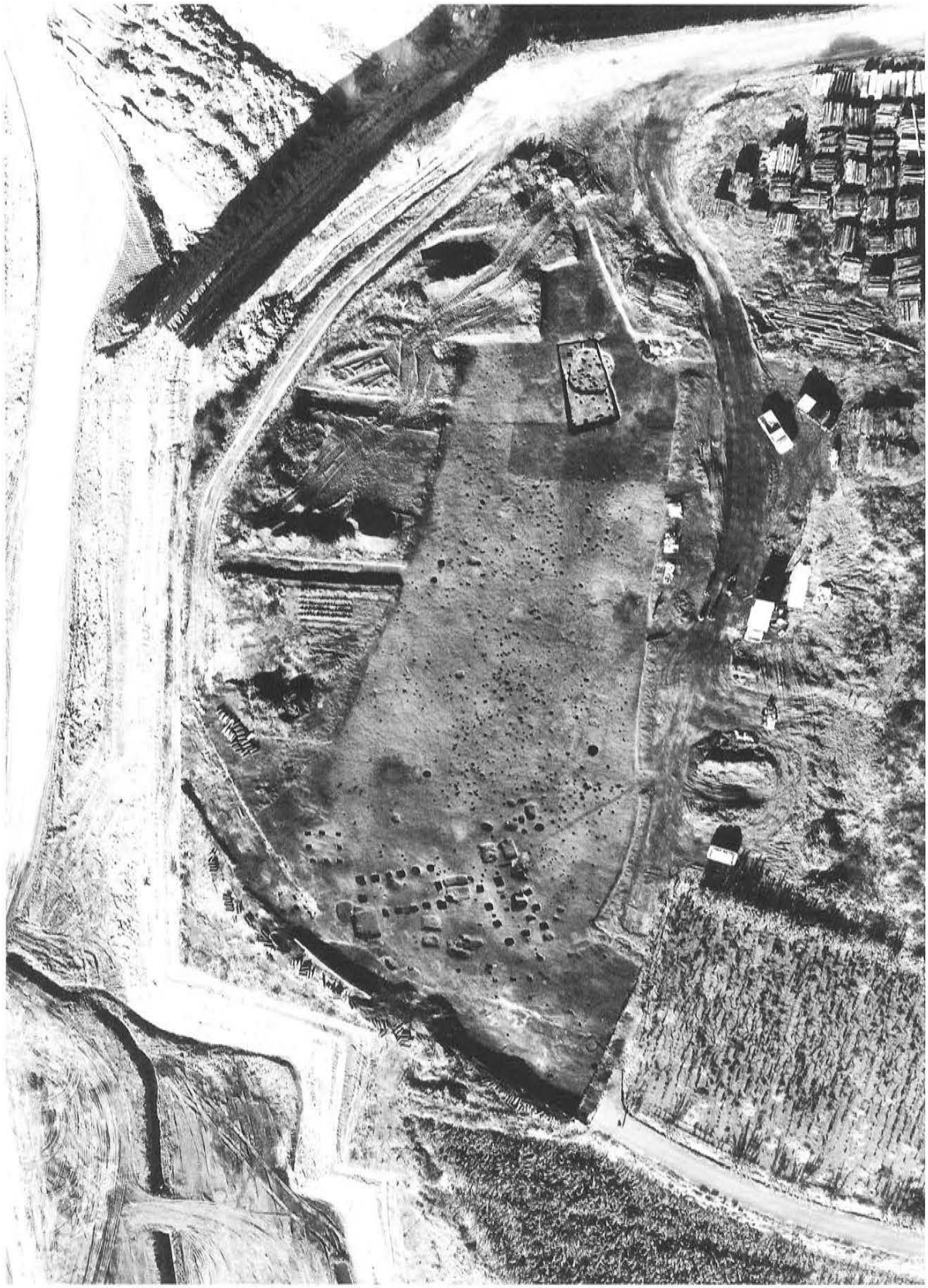
縄文時代の遺構は、有尾式期の竪穴式住居址１軒と諸磯式期の竪穴式住居址１軒が重複して調査区北西の丘陵縁辺に検出された。

奈良・平安時代の遺構は、９世紀中葉の竪穴式住居址２軒が調査区南東の丘陵縁辺に検出された。この他、大型の掘立柱建物址４棟と土坑９基を確認した。大型の掘立柱建物址からは８世紀代の土器が検出されている。４棟の掘立柱建物址は、２棟が東に向かい長軸方向が90度になるように配置されている。他の２棟も小型ながら周辺に配置されている。柱穴は平均すると一辺が１㍍程の方形で、柱痕を確認できる物もあった。掘立柱建物址に隣接して隅円長方形の土坑が２基を１単位として３単位確認されている。これらの土坑も掘立柱建物址と密接な関係にあった遺構と推測される。平面が方形の柱穴を持つ掘立柱建物は奈良時代を中心とする時期の建物と考えられており、竪穴住居の時期は９世紀中頃で、Ｈ－１号住居址が重複するＴ－１号掘立柱建物址に後出することからも、建物の年代をより限定できる。本遺跡の建物群は、重複や建替えの痕跡が無く、柱穴の形状が類似していることから、近接した時期に建てられたものと思われるが、軸方向に統一性を欠いている。特にＴ－１号掘立柱建物址のような２間×５間という規模の施設では、周辺の建物が桁方向を揃える場合が多い。Ｔ－２号掘立柱建物址も一般的な集落内の建物とは考えにくい規模である。遺跡内には奈良時代の遺物も混じっており、付近に奈良時代の集落が存在する可能性が想定される。本遺跡の建物群の性格の解明には近隣地域の調査資料の増加がまたれる。

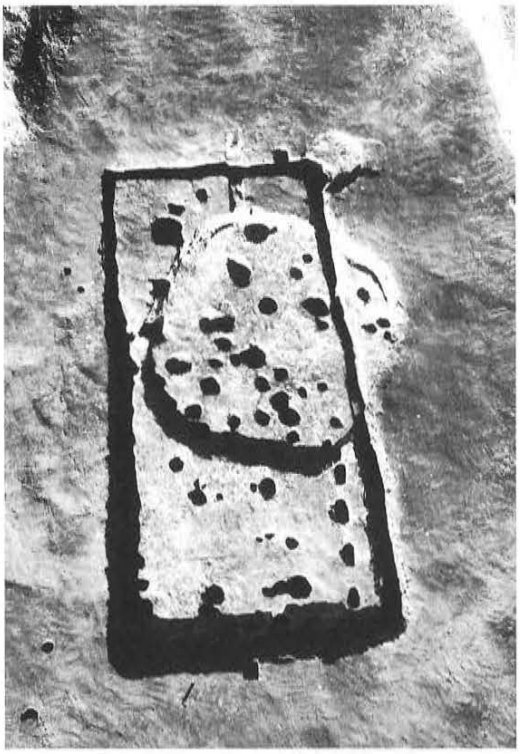
写　真　図　版

鍛冶ヶ嶺遺跡全景

図版２



鍛冶ヶ嶺遺跡全景

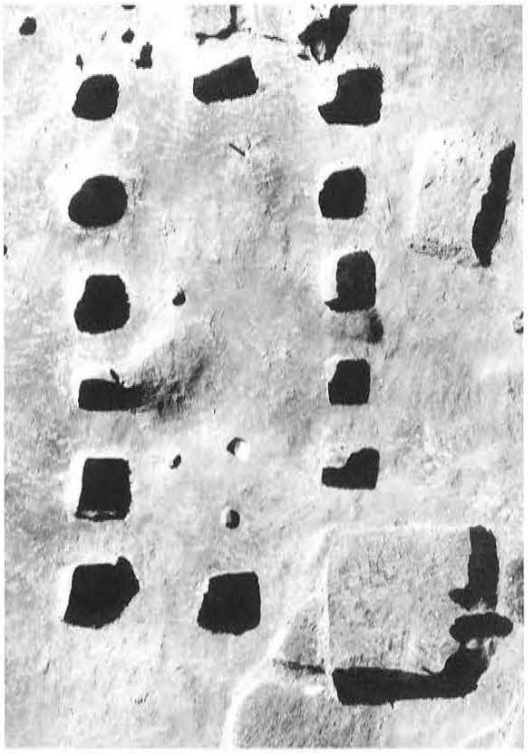


Ｊ―１号・Ｊ―２号住居址全景

Ｈ―１号住居址全景

Ｈ―２号住居址全景

掘立柱建物址全景



T—１号堀立柱建物址全景

T—２号堀立柱建物址全景

T—３号堀立柱建物址全景

T—４号堀立柱建物址全景

発掘調査抄録

ふりがな	かじがみねいせき
書名	鍛冶ヶ嶺遺跡
副書名	豊順鉱業株式会社ベントナイト露天採掘事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	千田茂雄
編集機関	安中市埋蔵文化財発掘調査団
編集機関所在地	379—0192　群馬県安中市安中一丁目　23—13
発行年	西暦2001年8月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
鍛冶ヶ嶺遺跡（かじがみねいせき）	安中市嶺字鍛冶ヶ嶺（あんなかしみねあざかじがみね）	102113	C—8			19941101 － 19941130	2,800m²	豊順鉱業株式会社ベントナイト露天採掘

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
鍛冶ヶ嶺遺跡	集落	縄文時代 奈良・平安時代	縄文時代竪穴住居址2軒 奈良・平安時代竪穴住居址2軒、掘立柱状建物址4基、土坑9基	縄文土器・石器 土師器　須恵器	掘立柱状建物址は官衙あるいは寺院等公の性格を持つ可能性有り

鍛冶ヶ嶺遺跡

豊順鉱業株式会社ベントナイト露天採掘
事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

発　行　日　平成13年8月31日

編集・発行　安中市埋蔵文化財発掘調査団
群馬県安中市安中1丁目23―13

印　　刷　朝日印刷工業株式会社